29-333

臺灣總督府圖書之印

時記

小林里平著

東京　政教社藏版

明治
43. 6. 17
內交

序

予は全國漫遊途次五月十四日沖繩に渡航した。すぐ目についたのは梯梧（でいご）といふ眞赤な燃えるやうな花であつた。さうして如何にも夏らしい感じのする花だと思うた。次いで夜になると、螢が飛ぶ。沖繩特色の家のぐるりの石垣に淡く光つてをるのなどを見て、日中の炎熱を掃ふ一掬の涼味だとも感じた。が、其の後よく注意して居ると、鉢作りの朝顔が咲いてをる。波上宮では萩の咲いてをるのを見た。其の上夜更けて蛙の鳴く音をも聞いた。夏らしい感じが爲めに動搖して、如何にしてこの感じを纏めるべきであらうかなど思うた。沖繩臺灣の如き風土の異なる地方の季題趣味問題

は遂に俳句上の大問題である。李坪子が先づこの大問題に指を染めて臺灣歳時記を編むといふ。臺灣に住む俳人の爲めに幾分の參考となり、事物の統一を缺く內地人に臺灣の特色を紹介するといふ事の外に臺灣の季題趣味の解決に資する第一著手として、其の勞を多とせざるを得ぬ。今後更に臺灣の事情の比較的普遍性を帶ぶる時代の來た時、臺灣特色の俳句が、一地方的特趣として取扱はれる機會に接した時、この書が幾分の功を頒つべきはいふまでもない。この礎の上に年を追うて樓閣の築かれんことを希望するのである。

明治四十三年五月廿九日

鹿兒島客中　碧梧桐

凡例

一本書の目的は人事、動物、植物の三部類中臺灣に特殊なる行事季物を蒐集說明するにあり

一本書の收むる所、特に此の三部門に限り、敢て其他に及ばざる所以のものは、畢竟天文、地理の如きは內地と略同一にして、殆んど臺灣特有と認むべきものあらざればなり

一由來、外海の舶載に係ると雖も、將來旣に久しく、殆んど臺灣特產と區別すべからざるものは亦之を收む

一假令臺地に特殊のものと雖も、旣に內地の歳時記類に記載說明しあるものは概ね之を略す、但し臺地に見るもの、其說明する所と全く異なるものは間々之れを再說す

一異名は或は揭げ、或は略す必すしも定例あるにあらず、要は唯主として文學上に引用せらるゝものを記するにあり

一異名中、或は種類に屬するものありと雖も、繁を避けんがため、暫く之れが區別を略す

一季節は或は開花の時季に取り、或は結實の時季に取り、或は採收の時季に取る、必しも定例あるにあらず、要は唯人の最も注目すべき時季に取るのみ

一本書の月日は概ね陰暦に依る、蓋し土人の用ゆる處に從ふのみ

一題材の蒐集はなるべく廣く、なるべく多きを務めたりと雖も、尚ほ遺漏せるものも多からん更に他日の補正に待つ

一題材の選定、季節の決定に付ては、再三意を致したりと雖も、尚ほ誤謬の存せんことを恐る、讀者幸に垂教を賜はらんことを

一本書の材料蒐集説明に付ては鳥嶺、葛南、松龍、刀水の諸氏に、出版に付ては城南、藪村兩氏に負ふ所大なり、特に記して好意を謝す

明治四十三年二月十一日

編者謹識

臺灣歳時記目次

春之部

八事

春聯……一
長年蔗……七
春飯……九
長年菜……一一
飯春花……一一
春錢……一三
甜茶……一三
甜料……一五
噴春……一六
搖錢樹……一七
神迎ひ……一八
燒金……一九
祖師祭……二一
初賣……二一
天公祭……二三
上元……二三
開山神社祭……二五
賭戲……二七
土地公祭……二六
釋典……三七
關帝祭……四八

花朝……五三
觀音祭……五三
清明……五四
拾骨……五五
春田植……五六
春田植祭……五九
媽祖祭……六〇
眞菰植……六九
春の蚊帳……六九
養魚池を作る……七〇
種魚を捕る……七〇

動物

春の蚊……七一
種魚……七一
ヨドロ……七二
鯛……七四

植物

珊瑚刺桐……七四
相思樹……七五
綿樹……七七
臺灣連翹……七九
茄苳……八〇
たうはぜ……八〇
たうあづき……八一
月來香……八二
桃金孃……八三
へご……八三
玉菜……八四

綠肥……八五

夏の部

人事

始政紀念日……八六
城隍祭……八六
半年丸……八八
香色……八八
夏刈上祭……八八
田植祭……八九
夏稻刈……八九
粟祭……九〇
夏稻打……一〇九
蛙捕り……一〇九
夏帽賣……一一〇
簟賣……一一一
龍骨車……一一二
揚水車……一一三
太甲蓆……一一三
太甲帽……一一四
林投帽……一一四
茎萊布……一一五
家鴨の孵化……一一五
茶選女……一一七
木藍刈……一一八
洗濯……一一八
養魚獵……一二〇
日射病……一二〇
麻刺利亞……一二一

臺灣赤痢……一三二

動物

水牛……一二四
穿山甲……一二六
土番鶯……一三一
三光鳥……一三二
信天翁……一三三
守宮……一三四
白蟻……一三六
鰐……一三七
夜光貝……一三七
正覺坊……一三八

植物

扶桑花……一三九
茶闌……一四二
黃蝴蝶……一四三
夾竹桃……一四四
鴛爪花……一四五
美人蕉……一四六
月桃花……一四七
仙丹……一四八
蕃花……一五〇
茉莉花……一五一
臺灣素馨……一五二
爵金……一五三
濱萬年青……一五四
指甲花……一五六
蝴蝶闌……一五六

日々草……一五七
綠珊瑚……一五八
水布袋……一六〇
檳榔樹花……一六一
楊桃……一六三
漂木……一六四
蒲桃……一六六
蕃石榴……一六七
牛心梨……一六八
月橘……一六八
破布子……一六九
楊梅……一七〇
ちやぼん……一七一
龍眼肉……一七四
荔枝……一七五

檳仔……一七七
蘋藋……一七九
蓮霧……一八〇
鳳梨……一八〇
れいし……一八二
烏龍茶……一八三
包種茶……一八四
婆羅密……一八五
蒲葵……一八七
光榔樹……一八九
赤榕……一九〇
林投……一九〇
烏心石……一九一
島百日紅……一九二

龍舌草……一九二
夏の新米……一九三
山藍……一九四
芽生姜……一九六
樟……一九六
苴麻……一九七
愛玉……一九八

秋之部

人事

乞巧奠……二〇〇
施餓鬼……二〇一
燈籠會……二〇四
竈神祭……二〇六
廣澤尊王……二〇六
臺灣神社祭……二〇七
刈上祭……二〇八
籾乾場……二〇八
田簑……二〇九
稻打桶……二一〇
稻打幕……二一一
稻打桶……二一一
木藍刈……二一一
眞菰採……二一三
柿の澁拔……二一三

動物

虱目魚……二一五
白帶魚……二一六

植物

金合歡……二一六
檀特……二一八
樹蘭……二二四
玉蘭……二二五
顏桐……二二六
虎尾蘭……二二七
馬茶花……二二七
時計草……二二九
生姜の花……二三〇
甘蔗花……二三二
さつまいもの花……二三二
蕉實……二三二
臺灣黑柿……二三四
麵包樹……二三五
釋迦果……二三六
蕃瓜……二三七
茄白筍……二三八
楓……二四一
月桃實……二四二
椰子……二四四
檳榔樹……二四五
木藍……二四七
なんきんまめ……二四八
凸柑……二四九
水柑……二五一
桶柑……二五二
水芋……二五三
樹豆……二五五

蕎豆……二五七
ワラス豆……二五八
熟柿……二五九
澁抜柿……二六〇
伏稻……二六〇

冬之部

人事

水官祭……二六一
補冬……二六三
冬節丸……二六四
黒頭巾……二六四
黒手巾……二六五
召君眉……二六七

動物

耳環……二六八
火籠……二六九
冬の蚊帳……二七〇
緑肥蒔……二七〇
苗代圍……二七一
甘蔗植……二七三
甘蔗刈……二七五
神送……二七五
玉皇祭……二七七
店仕舞……二七八
春聯賣……二七八
除夜……二七八
爆竹……二七九

冬の蚊……二八三
餞……二八
ぐれ……二八四
西刀魚……二八四
鰡……二八五
鰌子……二八五

植物

たうをがたま……二八七
紅竹……二八八
猩々木……二八九
蕭草……二九〇
さとうきび……二九一

臺灣歲時記

春之部

在臺北　小林里平編

人事

▲春聯（臺灣名）（春聯（フンリエン））（異名）門葉、門聯

臺灣の俗、新年には家々門頭、必ず紅紙に、吉祥の對句を書した る、門聯を貼付するの例である、但聯句を貼付するのは、決して新年にのみ限ざるにあらず、新居、出産、結婚、登第等、苟しくも事の慶すべきある、必ず之を貼付するの例である、そして總て之

れを稱して門聯といふのであるからして、新年の分は他の門聯と區別するため、特に之を春聯と稱するのである。

今の春聯は、其昔し桃符より變じたものである、即ち古人の慣用したる春聯の對句中にも『神荼＝鬱壘』などゝ、桃符の神名を其のまゝ用ゐて居るのもある、『爆竹一聲除舊＝桃符萬戸更新』とか、又たは『貞下起元梅蕚先傳信色＝靜中含動桃符新換春來』とか、又たは『爆竹聲中一歲除。春風送暖入屠蘇。千門萬戸曈々日。總把新桃換舊符』などゝある如く、春聯の對句中多くは桃符の句を用ゐて居るのは全く之れがためである。

桃符は桃板、桃梗、仙木などゝも云ふ、山海經にも東海度朔山（俗通朔に作る）山有二大桃樹一。蟠曲三千里。其枝向二東北一。曰二鬼門一。萬鬼出入也。有二二神一。曰神荼。曰鬱壘。主領二百鬼之一害人者一。執以飼レ虎。黃帝法象レ之。因立二桃符於戸上一。畫二二神一。以禦二兇鬼一。とあつて昔し桃符は全く惡鬼を防ぐために桃の板に神荼、鬱壘二神の像を畫きて門頭に掲げたものである、何時のころからか之れが一變して春聯となり、且つ佳辰を祝するの用に供せらるゝに至つたのである。

春聯は文字夫れの示すが如く、普通は對聯であつて二枚を一對として、戸口の左右に貼付するのであるが、時としては種々の變體のものもある、又其營業に依て色々適切な句を選ぶことになつて居る、一例を擧ぐれば

前門左右には（左門丞右戸尉）（或は左加冠右晉爵）

などゝ記するのである、又

入口の柱には（天増歳月人増壽／春滿乾坤福滿門）

などゝ書くのである、營業に依ての區別は

〜通常の商家は（利如曉日騰雲起／財似春風送雨來）

或はまた（生意興隆通四海／財源茂盛達三江）

などゝ記すのである、其他

酒樓は（聞香須下馬／知味可停車）

妓樓は（一雙玉手千人枕／半點朱唇萬客嘗）

などの甚だしいのもある、其最簡單なるものを門葉と稱し、大抵二三字づゝの簡單なのもある

門葉（和風／旭日）或は（神茶／鬱壘）或は（安燕／吉羊）或は（河清／海晏）

の類である、尙ほ變體の第一は門楣に掲ぐるもので、横に『恩承北闕』とか『紫氣東來』とか書するのである、勿論一枚ものであるから決して對句と云ふ譯けには行かぬ、又貧家の入口又は房室の入口等、戸の一枚の所には、戸の中央に一枚貼付するのみであるから、之れも亦一句づゝである、且つ此等には種々の文字畫を書いたのがある、一例を擧げて見ると『福祿壽』といふ文字を合せて桃の形に作つたものなどがある、其の意は鬼門除の桃符と佳辰を祝するための佳語とを合せ書したのである、又た之れと同一の槍の中に『又見一年春』と記したのがある、之は畫が桃で紙が例の紅紙であるから『桃紅又見一年春』といふ句の內、桃紅の二字は畫と紙色とに現はし、其二字を略したのである、又『春光煥彩』

といふ文字を梅花に作つたのもある、此等は唯一例であるが、文字は新禧の意に適ひさへすれば何でもよいのであるから、決して此等一二の例には止らない、春聯は曾に入口に貼付するのみならず、家具にでも何にでも貼付するのであるが、之れも其物に依て各〻其意味の異なる文字を使用して居る、凡そ臺灣人に取て一番大切な家具と云へば、先づ指を金箱に屈するのである、そして此金箱は大抵床櫃と稱して寢臺を兼て居る大金櫃であるから、ドンな大きな春聯でも貼付することが出來る、例へば『招財進寶』と云ふ四字を合せて一字に作つたのである、又例へば『黃金萬兩』といふ文字を一字に合せたのもある、又『有美王於斯』の五字を合せて福包みの形に作つたのもある、そして此れ等には其兩脇に必ず 堆金 積玉 と云ふ文字を貼付して居る、何れも祝福の意ではあるが、又臺灣人の慾張心を遺憾なく發揮して居る、其他机、寢臺などには單に『春』の一字を書いたものを貼付けたのも少なくはない。

此等は何れも書房教師の內職に書いて賣るものであつて、歲の市には皆大道に出て書きながら賣つて居る、一枚大抵五厘乃至三錢位であるが、時として富豪の用ゐるものには十錢乃至二三十錢すのもある。

▲長年蔗《臺灣名》長年蔗（ツンニーナヤア）

長年蔗は新年の飾物の一つであつて、白なり赤なり有合せの甘蔗を根付葉付のまゝ、門口に立懸け置くのである、其體裁から云

つても、其目的から云つても、全く内地の門松と云つた樣なものである、其心は本年中能く事の首尾を全うすること斯くの如くなれかしとの謎なるよし云ひ傳へて居るのである、何時のころから始まつたかは記錄の徵すべきものがないから分らんが、何れ臺灣は人も知れる如く、甘蔗の產地であるからして、始めは誰れかゞ甘蔗の豊作を祝するの意か何かで正月飾りに試みたのが追々擴まつたものではあるまいかと思はれる、それは兎に角今日では臺灣一般に行はるゝ正月飾の一種となつて居るのである、そして元旦に立てゝ、其まゝ上元即ち十五日まで置く家もあり、或は五日目位に取去る家もある、此日限は何れ家々の慣例に依るのであるから一定しては居らぬらしい。

▲春飯《臺灣名》春飯（ツンブン）《異名》長年飯、過年飯、隔年飯

春飯は正月の飾物の一つで、例の新年に神佛前に供へる山盛の飯である、之れも亦廣い意味に於ける敬飯の一種であるが、原來敬飯は何か慶事のある時神佛に供へる山盛飯の總稱であるから、正月のは特に之れを春飯というて、他の敬飯と區別して居るのである、特に正月の敬飯の他の敬飯とは少し意味を異にして居るといふのは春は國音存に通ずるので、春飯の春は一面に於ては存在の意味を持て居るので、春飯は存殘の飯即ち去年の喰殘りの飯といふ意を持て居るのである、それで之れを神佛に供へて祝ふのは、去年は大に好運で米も適樣に喰殘つたから、今年もそれにあやかる樣にといふのである、春飯といふも强ちハルノメシといふばか

りの意味ではないのである。

春飯には尙ほ長年飯、過年飯、隔年飯、の異名もある、其の名の異なるに從つて多少其意味を異にして居るのであるが、此處には略して置く。

春飯は除夜に炊いて、例の丼樣の大きな茶碗に山かけに盛て、其上に赤紙で作つた春花を挿して、歳神、祖先の佛前、及び自分の部屋の三箇所の卓上に供へて置くのであるが、夫れから後は五日迄毎日其飯を喰ふ代りに、其歳神に供へた飯を少しづゝ他の米に混せて炊いて食するのである、そこで歳神に供ふる分は、五日迄取て置て用うるのであるから、其間に腐らぬ樣に、一寸湯を通したいけにして置くのである。

▲長年菜《臺灣名》長年菜（クンニイツアイ）《異名》春菜、隔年菜、過年菜、素菜

長年菜は正月用の菜の物にして、一に春菜、隔年菜又たは過年菜といふ、其の原料は一定して居る、家に依て多少の差はあるけれども、普通は芥菜、芹菜、荷蘭豆及び豆干（豆腐の乾したもの）の四種である、此等は何れも除夜に煠て置いて、元日より五日迄の間、素菜と稱して、油氣抜きにして、唯醬油のみを付けて食するのである、俗説に正月に之れを食すれば長生するからといふので食ふのださうだ、丁度內地の節肴又は食積などゝ稱して、芋や大根を煮置いて、三元日間用ゆるの類である、但食積の如く、賀客應のために用ることは全くないらしい。

▲飯春花《臺灣名》飯春花（ブンツンホエ）《異名》春花

飯春花一に春花ともいふ、何の花かは分らぬが、正月の花だから多分梅の花位の處だらう、其作り方は紅唐紙を折つて花瓣の形を作り、それを三瓣づゝ竹串の先に貼付けたもので、實際の大きさは梅の花の五六倍も大きい。

飯春花の用方は、其文字自身の示すが如く、春飯の上に挿すだけのもので、全く一の飾物に過ぎないのである。

斯んな花であるから、自分で作つてもわけはないのであるが、面倒臭いから、何處でも暮に子供の賣つて歩行くのを買ふことにして居る、一本大抵二三厘づゝでくれる。

春飯の花あか〳〵と明けの春
掘こかす茶碗の花や三の朝

▲春錢《臺灣名》春錢（ツンチン）《異名》存錢、棹錢、過年錢、隔年錢

春錢は是又土音春、存に通ずるよりして、去年の生計餘りあるの意にかけて之れを祝ふのである、一に棹錢、過年錢又は隔等錢と稱し、大抵五六錢づゝの孔方錢を緡に通して、新年飾りの卓上、春飯兩側に二行に供へるのである、尤も近來は土人間にも新銅貨が非常に多く流通するので、孔方の臺灣錢の代りに、銅貨七八錢位づゝを供へて置く家もある、又稀れには古金古錢などを供へる家もある。

▲甜茶《臺灣名》甜茶（ナンチエ）

甜茶は香茶でも烏龍茶でも何でも平常用の茶でよいから、それに砂糖を入れて甜くしたものである、勿論甜い處を嘉祝のものとし

てあるのであるから、他の慶事の折りにも必ず之れを用ゆるのであるが、其一番に多く用ゆるのは正月であるから、一口に甜茶と云へば必ず正月のものとしてあるのである、勿論甜い茶と云ふ丈けで、何んにも外のと變つた點がないのだから、之れを新年の一季物とするのはどうであらうかとの疑ひも起らないではないが、併し之れを薦めるには必ず一定の言葉があつて、年賀の客が來ると、先づ一番に之れを捧げて、客が老人なれば『老人康健』とか、壯年なれば『食大趁錢』とか、子供なれば『賢大漢』とか、又は商人なれば『新年發財』とか云ふ樣な、何れ綠喜のよいことを云つて出すのであるから、之れと合せてどうしても新年の一季物とせねばならぬのである。

▲甜料《臺灣名》甜料（ナンリヤウ）《異名》四甜料、六甜料

甜料は正月用の茶菓子にして紅棗、紅橘、氷糖、落花生、糖瓜、瓜子などを砂糖に漬けて甜くしたものである、其甜い處が即ち嘉祝用の菓子たる所以である、其數は家に依りて或は四種、或は六種、必ずしも一定しては居らぬが、臺灣人は內地人とは反對にして奇數を忌む故に、此場合にも亦四とか六とか云ふ偶數を用ゆることにして居るのである、そして其四種なるときは之れを四甜料と云ひ、六種なるときは六甜料と云ふのである。

臺灣人の正月には此等の物を鉢に盛つて置いて、年賀の客が來ると、先づ例の甜茶を饗し、次で右の內の橘を捧げ『新年大吉』と云つて薦めるのである、其心は橘吉音相通ずるからである、其れか

ら續いて四甜料なり六甜料なり、外のものも一々取て薦めるのであるが、客は之れを受くると直に盆の端に置いて仕舞ふ、ホンの祝福の儀式一遍に止まつて、誰れも實際に之れを喰べるものは殆どないのである。

▲噴春《臺灣名》噴春（ブンツン）

噴春は理髮人、靴直等の賤業者を以て臨時に組織せらるゝ一種年頭專用の臨時音樂隊である、之れを噴春と稱する所以は、彼等の音樂は非常に陽氣であるから、能く春氣を噴出すといふので此名を得たのである。

彼等は四五人づゝ隊をなし、支那樂器中にても特に音響の高い喇叭、太鼓、銅鑼、鎖哪、鬧鈸、韻鑼等を吹奏しつゝ市中を徘徊し

呼ばれたる家に寄て春串、秋串、將軍令、進酒等の支那樂譜中にても最も陽氣なものを選で吹奏するのである、彼等の演奏する所は唯之れのみであつて、他には何等の舞も踊もするのではないが其樂器樂譜が非常に陽氣なものばかりであるから、臺灣人は之れを以て年頭の第一聲と爲し、新年には必ず之れを聞くべきものとして居るのである、內地で云ふと一寸丸一太神樂と云つた樣なものである、そして之れを演奏せしむる家は、大抵三五錢乃至十錢位の小銅錢を紅紙に包で與ふるのである。

噴春や聲暖かに春串譜

▲搖錢樹《臺灣名》搖錢樹（ヨンナンチュウ）

搖錢樹なるものは、元日より四五日間、乞食寮に住する純粹の乞

食が榕樹の小枝に、紅糸を用ゐて奇麗な臺灣錢五六文を吊し、之れを鳴らしながら、目出度い言葉を唱へつゝ人の家に至りて一厘二厘づゝの錢を乞ふ所の一種の乞食である、其唱ふる文句は錢樹進門來。與汝添丁大發財。錢樹搖得高。代々子孫中狀元。錢樹搖得誇。門前立旗竿。錢樹搖有得。十仔十新婦。五個十擧人。五個中進士。飼猿較大牛。等何れも五六字の短い吉祥語である、是れ迷信深き臺灣人の歡心を買はんが爲め自ら出來たものであつて、誠に臺灣的乞食とも云ふべきものであらう。

▲神迎ひ《臺灣名》接神（チイシム）

接神は正月四日に行ふ所の神迎ひである、俗說に諸神十二月二十四日を以て上天し、天上にありて元旦玉皇上帝に朝賀し、此日を以て還駕すると云つて居る、そこで此日は右の諸神を迎ふるがため各戸に於て香燭醴牲を供へ送神の時に於ける如く門口にて金紙と共に神馬駕馬を焚き、其煙を上天せしめて諸神の騎乘用に供し以て之れを迎ふるのである、其儀式は大體送神の時と同一であるが、唯其異なる所は、第一に送神の時には神馬に火を付け焚きながら空中に拋つのであるが、接神の時は門口に、金鼎と稱し、鍋の樣なものを据置き、其内にて焚すのと、第二に送神の時は大抵朝から送るのであるが、接神の際は大抵十二時前後に行ふのとの差異があるのである、内地の神迎へを現實にしたやうなものた。

▲燒金《臺灣名》燒金（シヨウキム）《異名》燒金紙、燒銀紙

臺灣人の神佛祖先を祭らんとするや必す金銀の箔紙を燒くの例で

ある、其の理由は在天の神佛祖先の靈に、金銀貨幣を寄送するの意を寓するのである、彼の賽錢奉納と稱する、內地の現生主義に比すれば頗る高雅である。

燒棄する箔紙には、凡そ一定の例がある、印ち神佛には「壽」字の金箔紙を用ゐ、祖先には銀箔紙を用ゆるのであるが、唯玉皇上帝にのみは「天」字の金箔紙を用ゆるのである、そこで各寺廟に於ては、豫じめ金爐なるものを備置きて、燒金の用に供してあるから各其內でやくのである、若し其備付なきときは、其邊の地上で燒いて去る、跡に紙灰がひら〳〵風に舞つて居るなど、中々に雅趣がある。

右に述べる通、燒金は何時何物にすると限つたことはないが、新年が一番多いから、之れも新年の一季題とするを可とする。

▲祖師祭《臺灣名》祖師公生《異名》祖師廟祭

祖師とは清水祖師の略で、其廟は至る處の街衢にあるのであるが正月六日は其の誕生日に相當するといふので、各廟とも、此日に於て廟祭を執行するのである、當日は各廟とも盛に綵を結び燈を點し犧牲を供へて祭りを爲し、市中には屋臺芝居などを演じて、頗る熱鬧するのである。

▲初賣《臺灣名》開張

正月五日より十五日迄の間に、市中各商家に於ては、各吉日を選んで店を開く、俗に之れを開帳といふのである、此日は商品を特別廉價に販賣し、又平常往來交際して居る取引先の主人、又は親

感朋友などを招いて饗宴を張る、恰も内地の節招又は節振舞と同一主義のものである。

▲天公祭《臺灣名》天公生（ナンコンシヤイ）《異名》王帝生日

玉皇上帝のことを俗に天公といふのである、正月九日は恰も其の誕生日に相當するといふので、此日には民間の大家小戸、皆其の入口に香楮燭燦、及び牲醴などのおきまりものを供て、空を望んで九叩の禮拜を行ふのである、此日の市中は實に元旦よりも一層熱鬧を極むるのである。

▲上元《臺灣名》燈節（ナンツイ）《異名》華燈夕、上元冥、燈夕

燈節のことは臺灣慣習記事に左の如く記してある。

△正月十五日　上元、俗に之れを燈節といふ、此夜を元宵とす、民間戸々香燭牲醴を供へ、鞭炮を放ち、金紙を燒き神佛を祭る、此夜神社佛閣、巨門細戸に至る迄、都て綵灯を點し、火燭煌煇、以て旦に達す、其燈一ならず、綉球燈、蓮花燈、鰐魚灯等、數十百種あり、各意匠を凝らし、新巧を競ふ、民家の子弟は、各自各形の綵灯を捧げて、市中に來往遊戯す、就中見るべきものを龍灯とす、龍灯は竹を立て龍骨を編み、紗を以て外部を貼り、中に蠟燭を點す、頭尾鱗甲、鬚眉口目甚だ明劃、其巨口眼珠は能く活動し、恰も眞龍を見るが如し、長さ七八丈、壯夫十人許り、各竹捍を龍腹に縛して之れを捧く、又之れに副ふるに龍珠の一個を以てす、形、寶珠の如し、外に彩色を施し、内に燭光あり、是れ即ち龍灯の先導にして、珠左轉すれば、龍頭亦左に向

ひ、龍身亦左に盤旋す、珠、右轉すれば、龍頭亦右に向ひ、龍身亦右に轉輾す、起伏縱横、翻弄自在なり、龍燈には必ず樂手の隨ふあり、銅鑼太鼓、鬧鈔の類、大小七八種、飛龍騰空の勢焰を助け、熱鬧を添ふ、龍燈は先つ官衙に至り舞弄す、衙門には其至るを待ち、鞭炮を放ちて之を迎へ、翻舞畢て賞するに紅羽毛一對を以てし、之れを龍頭に掛く、舞燈の諸人亦茶果の饗應を受く、紳民の家亦之を迎へて紅綵を贈り、茶果を饗す云々

今や官衙云々のことは全く無いが、龍灯丈けは尙ほ稀れに舞はす處がある、其他の綵燈に至ては依然として盛に行はれて居る、華燈の夕の記事は、俳諧歳時記にも一寸記してあるが、模樣が少しも分らぬから、更に此處に記して置く。

▲開山神社祭《臺灣名》境主公生《異名》郡王祭、鄭氏祭

開山神社は臺南市油行尾街にあつて、延平郡王鄭成功を祀る所である、其初めて建立せられたるは遠く康熙時代にありと傳へられて居る、即ち當時里民に何姓某なるものが、土地の同志者に謀り醵金して堂宇を建立し、明の遺臣鄭成功を祭り、稱して開山王廟と云つたものである、次に同治十三年、時の臺灣巡撫沈葆楨が、鄭成功の遺勳を思ひ、奏請して國家祀典の一廟となし、大に堂宇を改築し、改めて延平郡王祠としたのである、次で明治三十年新政府亦其の功績を錄し開山神社と改稱し、更に縣社に列するとにしたのである、祭神としては、正殿に鄭成功及び其部將甘輝萬禮を安置し、後殿正中には其の太姫を安置し、右室には明寧靖王朱術

桂及び其の五妃を安置し、左室には監國鄭克塽及び其夫人陳氏を安置し、東西の兩廡には明末の海疆殉難の諸臣各五十七位通計一百十四位の位牌が安置してあるのである。

祭日は舊政府時代に在ては春秋二期に執行するの例であつて、其の春祭は、鄭成功の誕生日が正月の十六日であるといふので、同日に執行することになつて居た、そこで明治三十年、縣社に列せられて凡て日本式の祭典を執行するに當ても、やはり同日に施行した、それが丁度新曆の二月の十六日であつたので爾來それが例となつて、年々同日に一回祭典を執行することになつて居る、祭典の儀式は今日では凡て日本式にやるのであるから、別に變つたともないが、當日は內地人臺灣人の合併祭典であるから、內地人側からは擊劍、相撲、大弓、里神樂などを奉納し、特に土人側に取つては大埔街、油行尾街、仁厚境街、清水寺街、馬公廟街、柱仔行街の六境合して一合境となり、境主即ち氏神として居るので此等の氏子等は戶々に醴牲香火を供へて之れを祭り、各街上に於ては戲劇を演唱し、頗る熱鬧を極むるのである。

▲賭戲《臺灣名》博賭（ボアキヤウ）《異名》賭博、かけこと

《種類》十湖、十一到仔、璉寶、三倍仔、丟銅仔、鳥紅、雞母禿雞子、花會、叫投仔、五色籤、什侯、四色、換呼爐悶、輕侯看湖、十八、擲骨仔、骰仔、拾蔗、璉珍名、璉骰、虎豹賭、三字淸、釘糊仔、孤鳥、釣白魚、十五枝番、咬双音、打天九、五路番、花牌、

吊猿、叫對仔、雜字、援給仔、璉海鰻水蛙、輦覆笑、留對仔、覆死牌、大牌、約錢元、骰九金、什二面、席髮、投虎鬚、授九攤、猴九、十二仔、錢包、双付、槐柹仔、昇官圖、賭溪尙、連圍、賭箠仔、等對仔、輦叮嗚、三吉凸、謎錢包、過五關、擦烏、璉去量、對錢、翁鬍、六猴、換錢先、賭牌球、打堆、夫娶妻、璉三槐、狀元抽、釣八九、輦音會、賠仔、毛光牌、詩猜、開標、投仔博、賂寶、敗鬍、五十六枝番、石輪、狀元紅、狗累庐、打壯元、打大會、接龍、叫丕厶、厶寶、寶斗、搖色仔、斬猪肉、摘光干烏、九支十。

臺灣の風俗として、元日から十五日までの間は、官吏も人民も、男女、老若、誰れでも彼れでも、賭博に關する遊戯を試みないものはないのである、それで正月近くなると、一家の主人たるものは貸金掛金を取立つるとか、又は新たに借金を作るとか、手の屆くだけ廣く手を延ばして、集まるだけ多くの金を集めて其資に備へ、兒童竝に婢僕の輩も亦人より貰ひ受けたる祝儀小遣などを蓄へ置きて、之れが資に充てんとするの有樣である、愈〻正月になると、萬事を抛ち一意專念賭博の遊戯に箍つて居るのであるから、其盛なること夥しい、即ち舊政府時代に在ては、元日より十五日迄の間は、官府は勿論封印中として事務を見ず、隨て民間に於ても十五日迄は緊急要務の外は、大抵手を著けざる習慣であつたからして、此間といふものは先づ日々賭博にのみ暮して居つたといふ有樣であつた。

何故に清國時代に在ては斯まで賭博が盛を極めたかといふに、大體は矢張り娯樂の爲めにしたものに相違ないが、之をして愈〻盛ならしめた理由に至ては一にして止まらないのである、即ち元日より十五日迄の間は、官民同樂の儀に依て、官府に於ても此間は一切賭博を禁じないのと、尙ほ一の笑ふべき理由とも云ふべきは歳端に於ける賭戯の勝敗を以て、其年一年中の吉凶を卜せんとするがためである、そこで大官富商の家に於ても盛に賭場を開張し、貧民下賤の家々に於ても夫々之れを爲すのである、殊に下賤の輩に至ては、官衙廟宇の庭前又は大道に於て公然之れを爲して憚かる處がなかつたでのある。

其後日本に改隸して以來は、賭博の取締も一層嚴重にせらるゝことになつた、併し右の如く一時旺盛を極めて居つた賭博の風習は迚も一時に全然之れを改めしむることの難いのみならず、其種類も實に百有餘種の多きに及び、其内には内地の寶引双六などの如く、單に娯樂の一種にして、少しも風儀を害せざるものもある、旁以て今日にありても、三元日の間は、取締上多少の手心を要することなるべく、隨て今日に在ても正月中は、或種の賭戯に就ては頗る旺盛を極めて居るのである。

賭戯の種類は百餘種もあるのであるが、器具は骨子、骨牌、一文錢などを種々に應用するのであるから、悉く擧げた所で、十數種に過ぎない、そして器具に依て其方法も大方は想像し得らるゝこと、思はれるから、此處に其大略を説明して置く。

(一)璉寶、銅、鐵又は眞鍮を以て方形二重蓋に作り其内に文字を記したる骨子樣のものを入れ置き、一定の用紙の上に廻はし其文字の向きたるものを以て勝とするのである、

(二)骨子　一に投仔といふ、骨子を用うるには必ず投げるが故である、深く説明するに及ばぬことゝ思ふ、

(三)璉骰　之れは六角の獨樂にて、其六面に一より六迄の點數が刻してある、投げる代りに廻はすだけのものである、

(四)木札　或は紙のもある、占魁、板桂、人生等の文字が三十七種記してあつて、之れを當てるのである、即ち花會即ちチーハーに用うるものである、

(五)四色牌　之れは紅白青黄の四種、合せて百十二枚を以て一組となす、骨牌に車、馬、包、將、士、象、卒、俥、傌、砲、帥、仕、相、兵等臺灣將棊の文字が書いてあつて、手の牌とを早く合せ終りたるものを以て勝とするのである、此外尙ほ五色牌といふもある、木竹又は紙にて作り、二十五枚より成る簡單なものである、又烏紅牌とて、三枚一組のもある、毛公牌と稱して、四十枚より成るもある、

(六)天九牌、之れは木又は竹にて作りたるものにて、其數三十二枚あり、黑赤の點々刻しありて、其數を或る數に合せ得たるものを以て勝となすのである、之れには大牌と稱し、紙製にして百二十枚より成るもある、

(七)帥仕相牌、之れは、帥、仕、相、俥、傌、炮等の文字を記し

たる圓形の骨牌で、十二枚一組である、別に圓形金屬製の容物があつて、親元がそれに入れて置く牌を當てるのである、

以上(五)(六)(七)の三種は何れも內地に行はるゝ花札の變化したものと見れば大差はない、

(八)籤　金屬製三本の籤で、其一本に紐を付け置き、其紐の付き居る籤に錢を挿したるものを勝とす、之れは子供の遊戯で、內地の寶引の變體である、

(九)五色籤　五本の籤の一端を青黃紅黑白の五種に染め置き、之れを竹筒に入れ、其色を當てたるものを勝とするので、之れ亦子供の遊戯に屬す、

(十)呼嬉笑圖(十一)昇官圖(十二)狀元抽圖　共に內地の双六と同一樣式のもの

(十三)虎豹骰　四角の骨子にして虎、豹、獅子、象の文字を記したるもので、子供の賭戯を爲すもの、

(十四)獨樂骨子　骨子に蛙、百足、鰻、炎天などを記したもので子供用の采である、

(十五)臺灣錢　或は地に抛ち、或は壁に抛ちて其表裏に依て勝を決し、或は之れを廻はして掌若くは碗にて伏せ、其表裏を當てたるものを以て勝とす、此外尙ほ子供等の間に種々に應用せらるゝのである、要するに之は子供用賭具である、

臺灣に於ける賭博の種類竝に之れが器具は斯くの如く澤山あるのであるが、臺灣人は常に之を呼ぶに、其總稱たる賭博の名を以て

するのである、決して内地の如く、歌留多だとか、寶引だとか、双六だとか、種類に付ての特定名詞を以て呼ぶことは甚だ少ないのである、故に之れを季題とする場合には、矢張賭博とか賭戯とかいふ名を擧ぐるを以て一番穩當とする、賭博といふ名は耳障りだが、之れも寶引や双六の總稱だと云ふ方から見れば何でもない、予が之れを新年の季題と定むるも之がためである。

▲土地公祭《臺灣名》土地公生《異名》福德正神祭

土地公は一に福德正神とも云ひ、神農氏を祭つたものであるが、同神は二月二日に誕生せられたといふので同日を土地公生と稱し、四民此日に土地公廟に至りて祭禮するのである、土地公廟は餘り大きいものはないが、小さいのが各村落に澤山あるので、一寸田舍趣味を帶びた神樣である。

▲釋典《臺灣名》孔子公生《異名》おきまつり、孔子祭、文聖祭

釋奠は禮記の菜を釋き幣を奠さて、先師を禮す、といふより出で、遂に孔子祭の一名となつたのである、そこで内地では「おきまつり」とも云つて居る。

清國では孔子を祀れるものを文廟と稱し、禁城を初めとして、全國中苟くも直省府州縣城のある所には必ず之れを建立し、春秋の二季に莊嚴なる祭典を執行して居る、其祭典たる、宮中に於ては無論皇帝親臨して其典を擧げさせられ、地方に在ては地方長官必ず臨場して其式を擧ぐる、所謂國家祀典の一であつて、其の典儀の莊嚴盛大なること他に比類なき所である。

日本に於ても、文武天皇太平元年二月丁巳、始めて釋典を行ひ（續日本記）爾來明治維新に至る迄、久しきが間行はれたものであるが、時勢の變遷に依りて何時しか廢れて、今は全く見ることも出來ぬ、臺灣は曾て清國の領有に歸すること二百餘年の久しきに及んだので、此間國家の祀典として國帑の力を以て建立せられたる文廟も甚だ少くない、今現に存するものゝみを擧ぐるも。

臺南府文廟	臺南城內に在り	康熙廿四年建立
安平縣文廟	臺南城內に在り	康熙廿三年建立
鳳山縣文廟	隆興里舊城に在り	同上
嘉義縣文廟	嘉義城內に在り	乾隆十八年建立
臺灣府文廟	臺中城內に在り	光緒十五年建立
彰化縣文廟	彰化城內に在り	雍正四年建立
新竹縣文廟	新竹城內に在り	嘉慶廿二年建立
臺北府文廟	臺北城內に在り	光緒六年建立

（但し臺北は四十二年夏撤去）

等數箇の存在するのを見るのである、そして從來此等の各文廟は年々盛んなる祭典を執行し來たのであるが、明治二十七八年役の結果、臺灣は日本に改隸し、文物典章茲に一新すると共に、一時盛大を極めたる釋奠も、茲に全く廢れて、今は各地の廢宇に僅かに其面影のみを存して居るといふ有樣である。

唯臺南は舊時學者淵藪の地だけあつて、文廟建築の宏大なること全島第一なるのみならず、文廟の經費として多額の樂局租なる財

產を有し居りしがため、略式ながら今尙ほ之れが祭典を繼續執行して居る、其の典例の如き、多少舊時の觀を改めては居るが、尙之れに由て釋奠の典例如何を見得らるゝのは一の幸である、依て臺南文廟の釋奠に依て、左に其大略を記して置く。

文廟と云ふのは文聖孔子之廟の略であるから、主として孔子を祀て居ることは勿論であるが、猶ほ幾多の門弟子等をも配祀して居る、即ち廟の中央正面には至聖先師孔子神位と書したる靈位を安置し、左側には宗聖曾子神位、亞聖孟子神位と記したる二個の靈位を安置し、右側には復聖顏子神位、述聖子思神位と書したる二個の神位を安置し、尙左右兩廡には、所謂十哲七十二子等の先賢先儒を配祀し、後廡には孔子の父母の靈を配祀して居るのである

文廟の祭日は、清國時代には例年舊曆春秋の仲月、即ち二月八月といふこと丈け一定して居て、其日限は毎年禮部に於て確定し、官曆に載せて頒示し全國地方官等は一律に之れを遵奉することになつて居たので、臺南文廟の祭日も無論之れに從つて居つたのだが、本邦改隸後は、清國の政令と何等の關係がなくなると共に、祭日を定むるものもなくなつた、そこで臺南では、釋奠事務所たる例の樂局の董事(世話人)が定むることになつて居る、然らば董事は如何に之れを定むるかといふに、春秋に祭祀するといふことは昔しよりの前例にして今之れを改むるの必要もないから、先づ春秋に祭祀することにして居る、そして月は舊曆の二月八月であつたから、之を新曆にて一ヶ月進め三月と九月とに執行するとに

して居る、尙ほ其の日の處は、昔しは清國でも日本でも、大なる差支なき限りは、二月及び八月の上丁の日に執行するの慣例であつたからして、今日も大概なら三月九月の初めの丁日に執行することにして居るのである。

愈祭の當日には、神前所狹き迄、例の簠簋籩豆俎篚の類を列べ立て、以て種々の蔬菜牲醴、幣帛香燭を供するのである、之れが釋奠の主たる目的であるから、其供物の數たるや夥しいものである、供物の陳列其他の設備が出來ると、愈爆竹の相圖に依りて參拜の各官民及び舞樂佾生、執事人等著席するのである、そして釋奠は最も禮義を重ずるのであるから、內地人も無論文武官並に一私人共相當の禮服を著して居るが、殊に漢人は學者文人共に、學位階級に依つて舊政府の定めたる清國式の禮服禮裝をして着席するのである、全體臺灣漢人の禮裝も、改隸後は追〻折中的略式に流れて居るので參列員悉く舊政府所定の禮服を著用する儀式は、此れと武聖祭の外には一寸見られないのである。

諸員の著席があると、最初に先づ迎神の奏樂がある、此奏樂が終ると、次は地方長官が祝文を朗讀する、茲に其一文例を擧げて置く

維某年、歲次某干支、朔越某日某干支、正献官某、分献官某、敢昭告於至聖先師孔子之神、曰、維師、道冠古今、德配天地、刪述六經、垂憲萬世、今茲仲春謹以帛醴粢、祇奉舊章、式陳明薦、以復聖顏子、宗聖曾子、述聖思子、亞聖孟子、尙饗

地方長官の祝文朗讀が濟むと、茲に始めて參列を文武官人並に學

士文人等の禮拜がある、此禮拜にも漢人は皆鄭重に例の三跪九叩の禮を行ふのである、其間種々の舞樂を演奏するのであるが、此の舞樂が即ち佾の舞である、此舞は六佾、八佾の二種に區別してあつて、八佾の舞には八人づゝの樂手八列、即ち八八六十四人を要し六佾は、六人づゝの樂手六列、即ち六六三十六人を要するのである、そして八佾は天子の舞とし、六佾は諸侯の舞としてあるのである、然るに孔子は大夫の位を以て文宣王に封せられた人であるから、諸侯の禮に從て、六佾の舞を用ゆるのである、元來釋奠は禮樂を重しとして居るので、此舞樂も最も嚴肅を旨として居る、そこで當日錯誤などあつては大變だといふので、祭日前には、樂手たるべき諸生及び縉紳先生等一同、明倫堂に集て、其の稽古をするのである。

書しは地方官自ら明倫堂に臨で舞樂の稽古を檢閲し、且つ祭典の當日には糾儀官なるもの臨場し、儀式舞樂に誤りあるや否を糾察し、若しも之れを誤るものは直に檢舉して相當の罰に處せられたのである、今は此事だけは無いが、古來釋奠の儀式が如何に嚴かに執行せらるゝかは、此一事に依て見るも明かである、尙ほ祭典の順序を明にするため、明治三十九年三月四日(上丁)臺南文廟に於て擧行せられたる釋奠の次第書を茲に掲げて置く。

一午前十時開祭　(燃爆竹爲號)各官及舞樂佾生執事等就位

一迎　神　樂奏昭平之章

一地方長官拈香　讀祝文(山形廳長)

一正分献行初献禮　樂奏舞宣平之章
一正分献行亞献禮　樂奏舞秩平之章
一正分献行終献禮　樂奏舞敍平之章
一徹　饌　樂奏舞懿平之章
一送　神　樂奏舞德平之章
一樂止望燎禮畢　各官及樂舞佾生執事人等退班
一飲　福　受　祚　（酒宴）

釋典は實に國家の祀典の一つではあるが、祭典一切のことは樂局と名くる事務所を置て、其董事に任せてあるのである、舊時臺南文廟の樂局董事は十餘人あつて、俱に累代相承けて其の職に任じて居つた、但樂局の董事は必ず秀才以上の學位を有するものを以て之れに任ずるの例となつて居るからして、若し其の子孫にして秀才になることを得ないものは、親に續いて董事となることは出來なかつたのである、然るに改隸後は、舊時の學位は何の資格にも數へられぬことゝなつたので、今日では何人でも董事たることを得るのである、けれども、今尙ほ自ら舊例に依て擧人秀才のみを以て之れに任じて居る、唯其人員は追々に減じて僅かに八人を存して居るのみである。

文廟には尙ほ樂局業なるものが付て居る、其收入を樂局租と稱し樂局董事に於て管理し、祭祀費樂器補修費、廟宇小修繕費等に充てゝ居つたのである、今日では、此財產は官廳に於て支配し、祭祀の際は其の收入の幾分を樂局に給し、以て祭祀費と爲して居る

のである。

釋奠は斯くの如く春秋二季に執行せらるゝのであるから、作句の上には春のは單に釋奠と云ひ、秋のは之れを秋の釋奠後の釋奠とするか、又は秋の季物に依りて其秋たることを明かにせねばならぬのである。

▲關帝祭《臺灣名》關帝爺生（ユウシテエヤアシイ）《異名》武聖祭

漢壽亭侯關壯繆、宗の徽宗の時、始めて忠惠公に封ぜられ、大觀二年、武安王に加封せられ、高宗の建炎二年に、壯繆武安王と加封せられ、孝宗の淳熙十四年に、英濟王に加封せられ、荆門當陽縣の廟に祭られ、元の文宗の天曆元年に、顯靈威勇武安英濟王と加封せられ、明萬の曆二十二年、爵を進めて帝となし、廟を英烈

と云ひ、同四十二年に三界伏魔大帝初威天尊聖帝君と勅封せられ次で又崇て廟を武廟とせられ、是れより孔子の文廟と竝祀せらるゝとなつたのである（陔餘叢考）次に清朝順治九年に、忠義初武關聖大帝と加封せられ、更に雍正二年、靈佑と加封せられ、乾隆五十三年に、仁勇と加封せられ、道光八年、威顯と加封せられたのである、それで普通に、其廟を稱して武廟又は關帝廟と云ひ其祭を武聖祭又は關帝祭と云うのである。

古來清國に在ては、文廟祭に於て禮樂、冠裳の盛儀を習ひ、武廟祭に於て忠誠義勇の氣性を作ることにして居るのであるから、此兩祭は偏廢すべからざるものとなつて居る、そこで廟宇の建築、祭典の儀式に至る迄、兩祭殆ど同一樣に定められて居るのである

から、釋奠の個條を參照すれば武廟のことも大抵はそれで分るのである、故に玆には一般の説明は略して、單に關帝祭に特殊の點のみを説明するに止めて置く。

臺灣に於ける關帝廟の最も古きものは臺南關帝廟であつて、其建築は遠く鄭氏の時にありと傳へられて居る、其規模も亦他の模型となすに足ると稱せられて居る、其他の城市通邑、苟くも文廟の存する所にして關帝廟を見ざるはなき有樣である、時としては文廟を見ずして獨り關帝廟のみを見る所すらある、以て如何に其の盛なるかを察し得らるゝのである。

關帝廟は前殿後殿に區別してあつて、其の前殿には關帝を祭り、多くは冕旒端凝、宛然在すが如き金像を安置して居る、後殿には木主を以て其の三代の祖先を祀つて居る、即ち一は曾祖父光昭公二は祖父裕昌公、三は父成忠公なのである。

其祭日は、春秋仲月(舊二月、八月)の分は文廟祭と同じく、之れを繰下げて新曆の三月九月と定めて居る、其日限は通常文廟の祭日たる上丁より十日を距てたる、第二の丁日とするの例である、尤も若し第二の丁日が月の十六日以後になるときは、繰上げて十六日に執行する筈である、(臺南關帝廟の例) 昔しは尚ほ此外に關帝の誕生日たる五月十三日にも祭典を擧げたのであるが、今日の臺灣には殆ど之れを執行する所はないらしい。

主祭官は兩聖祭共に其地在任の最上長官が務めるのであるが、祭文は大に異ならざるを得ない、故に此處に春秋仲月の祭祀に於て

京師の祭官が捧讀したる祝文の一例を記して置く。

春秋仲月。

維某年月日、皇帝遣某官某、致祭於忠義神武靈佑仁勇威顯關聖大帝之神曰、惟神秀毓河山、名垂今古、英風正氣、世曆久而彌新、大節純心、史相傳而草匹、念神靈之顯著、命典禮以優隆、茲當仲春(秋)、用昭時饗、尚其敢格、鑒此精虔、尚饗

文武兩聖祭共に、文武の學士文人等、悉く參拜するのであるが、唯文聖祭に在ては文學位を有するもの先づ參拜し次に武學位を有するものに及び、關帝祭に在ては武學位を有するもの先づ參拜し次に文學位を有するものに及ぶの區別がある。

祭典の間、倫の舞を爲すことは、是又兩聖祭同一であるが、唯其入數が異なる、即ち文聖祭は六倫の舞であるが、關帝は大帝に封せられたから、天子の禮に從つて八倫の舞を用ゐ、八人づゝ八列即ち八八六十四人の舞樂を奏するのである。

▲花朝《臺灣名》花朝(ホエチヤウ)

二月十二日を百花の生ずる日として居つて、俗に此の日を花朝といふのである、そして此日、晴れなれば百果豊熟すといふので、庶民皆此日の晴天ならんことを祈るのである、何も儀式ばつたことはない。

▲觀音祭《臺灣名》觀音媽生(コワンインマアシイ)

觀音菩薩は、二月十九日に降誕せられたといふので、此日には民間各戸に於て、壽桃壽麵と稱し、米粉にて製したる桃形の菓子を

作り、之れを箔紙爆竹と共に携へ、廟に行きて祭りをなすもあり或は自家に於て祭るものもある。

▲清明（臺灣名）清明（ツイミヤナ）（異名）清明節、献紙、壓紙、孝墓、祭墓、伸墓（アンボテ）

清明節は三月の十日前後にあるのであるが、臺灣人は此清明の前後三日間に於て、各菲素酒飯等を携へ行き、之れを墓前に陳列し、香を上げて祭りを爲し、順次墓前に跪いて三叩の禮を爲し、畢て箔紙を燒き鞭砲を放ち、終りに紙錢と稱して、黃唐紙に錢形を捺した紙を墓の上に置いて歸るのである、之れを掛紙又は壓紙といふ。

此時、青年婦女の、墓前に亡夫を哭するもあれば、或は母の子を哭して哀悼の情を述ぶるもある、が其聲裴娜聽くに堪へたるものあるを以て、輕薄の子弟等、窃かに胡琴を携へ行き、和調を試むる徒らものもある、又小兒等の墓に遊ぶものには、紅龜粿と稱する菓子を投げ與ふ、俗に之れを約墓粿といふのである。

兎に角臺灣人の墓參は、一年中に、此の一回のみであるから、此日は頗る賑ふのである。

▲拾骨（臺灣名）拾骨（キヨテクツ）

臺灣人は或る一定の年限を經たる後、一たび土中に埋葬せる棺柩を發掘し、其の枯骨を檢拾し、日に乾かして濕を去り、糸を以て之れを連接し、黃金罐といへる長圓形の甕に收めて改葬するのであるが、其拾骨は清明節を中心とし、其の前後十日内外の間を以

て一番盛に行ふのであるから、是又春の一季題となる。

▲春田植（臺灣名）播田（ホツツアン）

臺灣の田植は第一期が三月で、第二期が六月（舊）だから、第一期の植付けは、春田植として別に一季題とせねばならぬ、其植方も大分内地と變つて居るから此處に少しく説明して置く。

臺灣の俗、多くは水田に綠肥を用ゆ、綠肥にも種々あるが、多くは十字科植物の一たる、大菜を用ゆるのである、すると此植物は大根に似て鮮かな花を開く、農家は此花の開くのを期として一期稻の植付準備をするのである。

島に住めば田植暦も大菜花

臺灣の植代を作らんとするや、土壤粘土質にして丘を爲し易きに

依り、必ず最終に九尺ばかりの杉丸太を犁耙に着けて地均らしをする。

棒均らしするも植代地味なれば

臺灣人は閩粤兩種族であるか、閩族は先きに移住した丈けに、形勝の地を占め、且つ多少の金を溜め得て商人となり、粤族は後から移住せし故を以て、多くは田舍に落付き、村落を作りて農に從ふ、そこで閩族等は自らを福祿と稱し、他を客人と呼んで居る、後から來た人といふの意である。

粤族の客人と呼ばれ田植哉

看天田とは所謂天水田の土語である、施政未だ水利を講ずるの沿からざる本島に在ては、全島至る處之れあるを見る、南部に至て

殊に多い、そして天水田なるものは、降雨次第に植付けるのであるから、肥料をやるの暇がない、是れ多くは追肥を期して素植にするのである。

追肥を期して素植や看天田

漢人由來儀式ばりたることを好む、のみならず飲むことは何人も喜ぶ所である、故に農家に於ても、一年中の大事なる田植の時にはよく飲む、植付けの始めの日には拜土地公と云つて飲み、中ごろには拜大老公といふて飲み、植仕舞の日には拜有應公といふて飲む。

飲む事に田植祀りも三度かな

內地なら、畔沿に植初めて一方に植下るから、作が畔なりに曲る、そこで綱引正條植などゝいふ必要も起つたのであるが臺灣の田植は、一番の植上手が、眞中の作の一番に長い所から一直線に植去り、外の植手は、それに付いて兩去り植に植下る、そこで漢語旗尾田、所謂三角田になると、何時でも仕舞には其角に植寄ることになる。

旗尾田の旗尾に植寄る人數哉

總てといふわけではないが、宜蘭其他北部臺灣に於ては清國福州地方と同じく、氣候の關係上、二期稻の早植を必要とし、一期稻の元孕みするを期として二期稻を其間に植付ける。

本孕む早稻田に晩稻間植るけり

▲春田植祭（臺灣名）分秧祭

臺灣人は大抵清明前後十日間に田植をすることにして居る、之れを分秧といふ、其の分秧の夕には、米篩目と稱する菓子を作り、之れを牲醴と共に家内の福德神に供へて祭りを爲し、後、其供へたる牲醴菓子を下げて家内宴を張るのである。

之れは第一期稻の植付祭のことであるが、六月小暑前後、第二期分秧のとき、及び早晩兩季刈取の時も、之れと同一の祭りをするのである。

▲媽祖祭《臺灣名》媽祖生（マアツオオシイ）《異名》天后生、天妃生、

天上聖母は俗に媽祖佛と云ひ、其宮を天后宮といふ、本質は宋の刺史林氏の女を祭りたるものである、其の誕生日が三月二十三日であるので、此日に媽祖祭をするのである、此佛は內地に所謂お竹大日如來といふ樣な、一種怪しき佛であるが、船の救濟主として船員商人等の信仰すること深く、尙ほ一般民人にも尊敬せられて、各所に宏大なる宮があるのである、能く各所に媽祖會なるものがあつて、資金を集め、每年此日に盛んな祭りをするのである、尙ほ媽祖の事跡に付ては伊能梅陰氏の「天妃乃ち媽祖」の說あり、詳を悉せるを以て左に抄出す。

支那本土の港濱、殊に臺灣の市邑到る所の地に、航海安全の守護神として崇祀せらるゝ一神あり、「天妃」乃ち「媽祖」是れにして、吳榮光の「吾學錄」には「祭於福建福州府蒲田縣湄州及江蘇、淸口、惠濟祠、竝濱海各縣」と言へり、抑も此の海神の本質及由來果して如何ん、趙翼の「陵餘叢考」に「天妃」の一

篇あり、之れを說くこと詳かなり。(中略)　六二

乃ち以上の記事に據れば、古來天妃乃ち媽祖の本質に就きて、三の傳說あり、

(一)　宋の林氏の女にして、死後海上を往來し航海の難を佑けて、靈異あるに由るとする說、

(二)　蔡姓の人にして、難に遇ひ、海に投じて死せるに由るとする說、

是れなりとす、然れども趙翼の所說の如く、原と「水神」の崇拜に起り、偶ま時に傳はりし神仙傳の俗說と配合し、一の崇祀の形つくりを爲せしものなるに近く、其の起原は宋の末葉に在るものゝ如し而して之が應驗の歷史的事實に就きて「陔餘叢考」に附記して「臺灣の往來、神跡尤も著し」といへるは、殊に臺灣に於て、天妃乃ち媽祖の崇祀の盛んなるを致せる所以を說明せしものにして、之が要因に就きては、支那本土と臺灣との地理的自然の關係に由れるや明かなり、支那と臺灣との間に通ずる一水道、乃ち臺灣海峽は、實に赤道海流の一分派の朝路に當り、又危險なる回旋風の進路に當れり、隨て風浪多くは險惡にして、舟行の常に艱むは、免かれざるの數といふべく、加ふるに、造船の制尙ほ幼稚に、航海の術未だ發達せざりし往時に於て、支那臺灣間の通航に非常の困難を與へたりしは事實にして、此時に際り、由來迷信の概念强き支那人が、賴みて海上の安全を擔保するは、唯だ一の海神たる天妃乃ち媽祖あるのみ、其の

「天妃」を呼ぶに「閩人在母家之稱」を以てし、一に「媽祖」と稱するも故ありといふべし、是に於て乎、臺灣の港濱市邑到る所の地、專祠を立てゝ殊に之を崇祀するも、正さに偶然ならざるを知るなり。

而して嘗に漁舟商船の小民、爾かく航海の安全を祈願したりしのみならず、既に宋末以來元明清の各朝「封號」の典ありたる如く、臺灣に於ける天妃乃ち媽祖の崇祀は、亦實に公祀の一に屬し、官府之れが廟祠の建置を營めり、史に稱す、康熙二十二年清軍の鄭氏を臺灣に討つや、其順風平波、能く澎湖に入るを得たりしもの、一に神佑の靈異に在りとし靖臺の後、時の將軍施琅は「請加封天妃」の疏を奏せり。(中略)

事聞し清帝特に禮部郎中雅虎を澎湖に遣はし、媽祖灣（今の媽宮城）に在る廟內に於て祭りを致し（祭文は鐫額して堂に懸く）翌二十三年（天后）と加封あり、且つ施琅自ら臺灣府（今の臺南）なる元寧靖王の故居址に就き、廟を改建し、又旨を奉じて鳳山舊城內に建廟せり、次で雍正四年（神昭海表）の扁を御賜あり、今に媽祖廟內必ず此の四字の扁額を見るは、實に此に基づけるなり、之に依りて之を見れば、臺灣に於ける今の澎湖臺南なる媽祖廟の建置は、實に清の領臺以前（恐らく明末に於ける支那人の移住と共に）に在りて、歸清後公祀に歸し、爾後各地に建置せられしを知るべし

乾隆五十一年、林爽文の亂を作すや、翌年十月、將軍福康安は、

舟師を率ゐて征臺の途に上りしが、當時鹿港に安全の上陸を爲すを得たるは、亦實に天妃乃ち媽祖の神佑に賴れるものとし、五十三年亂平らぐの後其の廟を鹿港に勅建せり。

以て其の崇敬信仰の深厚なる內容を見るべし、今宋末以來、天妃乃ち媽祖の「封號」に關する沿革を年次して記すれば左の如し。

(宋)宜和五年	順濟(廟號)
紹興五年	昭應崇福
乾道五年	善利
淳熙間	靈惠
慶元、開禧、景定間、	助順、顯衛、英烈、協正、集慶
(元)至元中	護國庇民廣濟福惠明著天妃
同	靈慈(廟號)
至元十五年	泉州神女護國明著靈惠協正善慶顯濟天妃
同 二十五年	廣祐明著天妃
(明)洪武五年	孝順純正孚濟感應聖妃
永樂中	宏仁普濟天妃宮(廟號)
(清)康熙十九年	護國庇民妙靈昭應宏仁普濟天妃
同 二十三年	天后
乾隆二年	福祐群生
同 二十二年	誠感咸孚

同　五十三年　顯神參順
嘉慶五年　垂慈篤祐

而して以上皆な「加封」なるを以て、其清に於ける天妃乃ち媽祖の封號を記すれば左の如し。

護國庇民妙靈昭應宏仁普濟福祐群生誠感咸孚顯神參順垂慈篤祐天后

天妃乃ち媽祖崇祀の由來斯の如し、而かも殊に其の崇祀の盛んなる臺灣に於ては、啻に航海安全の守護神とするのみならず凡そ他の捍災禦難乃ち水旱疫疾寇亂等に至るまで、之が保佑を祈願するに至り、現に廟貌香火の盛なる、全臺の冠として知られ毎歲春期には南北の島民來り詣し、絡繹絶えざる、北港の同廟（雍正八年建つ）の如き邀福避禍の求祈、立ろに應ずと傳へらるゝに因る。（中略）

因みに曰く天妃の祀廟の本山とも稱すべきは福州の莆田縣湄州に在るものにして、蓋し土俗に傳ふる、天妃乃ち林氏の女は、此の地に生れしに依る、而して嘉慶六年には其父を「積慶公」に其の母を「積慶夫人」に封ぜられ廟の後殿に祭れり。

▲眞菰植《臺灣名》種茄白筍（ナエンカアペエスン）

食用蔬菜として眞菰の心を採るため、春其枯株を分けて植付けるのである、詳細は秋の部眞菰の芽の條を參照せよ。

▲春の蚊帳《臺灣名》春蚊罩（ツンバンターウ）

臺灣は熱帶地たるがために、夏秋は勿論、冬春と雖も蚊が居る、而

して臺灣の蚊はマラリヤの媒介を爲すと決せられて以來、一疋居ても蚊帳を釣るの必要があるので、春でも冬でも蚊帳を釣らねばならぬのである、そこで之れも當季の一題材となる。

▲養魚池を作る《臺灣名》做魚鹽（ソエヒイウン）

養魚池は本島に之れを魚鹽と稱し、毎年新暦二三月ころ作るのである詳細は魚苗の條を參考せよ。

▲種魚を捕る《臺灣名》拿魚種（リヤツヒイチイ）

安平邊にて魚苗に用ゆる兒魚を捕るのである、三四月ころ海邊の遠淺に麻布製囊網を建て其中に追込み、又は麻網で掬ふで捕るのである、詳細は魚苗の條を參照せよ。

動物

▲春の蚊《臺灣名》春蚊（ツンバン）

臺灣は熱帶地だけに、夏秋は勿論、春冬と雖ども蚊は絶えないのであるから、是れ又當季の一題材である。

▲種魚《臺灣名》魚種（ヒイチイ）《異名》魚苗、魚仔

養魚池は本島に之れを魚塭と稱し、稚魚を入れて成長せしむる所である、至る處多少之れなき地はないが、南部に至つて殊に多く、殊に大なるものがある、そして淡水池と鹹水池との二種あるのである。

淡水池に養ふものは鯉、鮒、鰻、鯉魚、草魚、鰕、戻魚などにして

鹹水池には殺目魚、芝鰕、花身、花苓等を養ふのである。

各漁村に於ては、毎年大抵陽暦二三月ごろより、養魚地の準備に着手するのであるが、其方法は、先づ乾固せる空池に、洽く人糞又は豚糞を撒布し日光にて十分乾燥せしめたる後、淺く水を引入れてミジンコを發生せしめ、それで十分水を引入れて、前記諸魚の子を放つのである、土人は此の稚魚を稱して魚苗といふのである。

淡水族の魚苗は清國潮州其他より輸入するし、鹹水族のは安平邊の海濱に於て、汀渚に遊んで居る處を、麻布製の蟹網を建て、又は長一間巾四尺位の丸竹を三角形に作つたものに麻布を縫付けて採集するのである、價は一尾二三厘位。

此養魚は、夏季の不漁を補ふためにするのであるから、大抵は夏秋の交に捕つて販賣するのである、時としては冬迄持越し、新年市場の生魚に乏しきを機として販賣するものもある。

そこで魚苗其のものを題材にするもよし、又其採集する樣を咏ずるのも面白い、但し採集の樣を咏ずれば自然人事になるは當然である。

▲ヨドロ《臺灣名》水占魚(ツイチヤムヒイ)《異名》龍占魚(リエンチヤムヒイ)《種屬》さより科

ヨドロは內地關東地方にてサヨリと稱する口嘴の長い魚で平常は近海又は灣內などに棲息して居る魚であるが、春夏の交交尾期を機として捲網にて漁獲するのである、概ね生魚のまゝ販賣して居るが、鹽物にすると一層甘く食はれる、南部各地にても捕れるし宜

蘭地方でも大分に捕れる。

▲鯛《臺灣名》加納魚《種屬》たい科

鯛は多少は何時でも捕れるが、其の一番よく捕れるのは其の産卵期たる春である、そして之れを捕るには、鯛網又は釣針にて捕るのである、北部臺灣にては基隆産を最も佳品とするので基隆鯛の名を得て居るのである、其の盛りに土人魚屋が「赤い鯛よー」と怪しい日本語で賣り歩行くのも一奇である。

植物

▲珊瑚刺桐《臺灣名》刺桐《科名》荳科

珊瑚刺桐のことは殖産局苗圃苗木代價目錄に、

灌木にして、春季枝頭に薤刀狀紅色の花を簇生す、一葉柄三葉を具し、各小心臟形を爲す、庭園に植うるに宜し。

とあり、又孫元衡の詩に、

春色曉白海涯。柳營繞遍到山家。崑崙霞吐千層蕊。華嶽蓮開十丈花。百朶紅蕉簇一枝。偶然著葉也相宜。烟籠絳羽鸚哥舞。(雲南鸚稱哥花) 信是春城火樹奇。

といふのが之である、何も花のない冬から早春にかけて深紅の花を穗狀に簇生する所頗る賞するに足る。

▲相思樹《臺灣名》相思仔《科名》荳科

相思樹は形狀柳に似て並行脈を有し、且つ滑澤なる互生葉を生ずる常綠喬木である、そこで內地人は俗に臺灣柳などゝ呼んで居る

が他に眞の臺灣柳があるから混じてはならぬ。

相思樹の葉たるや、實は祖先の葉柄である、昔は此葉柄上更に合歡に似て稍細き羽狀葉を持つて居たのである、それが年を經るに從つて段々退化して、或は進化したのかも知れないが、兎に角それが段々小さくなり、果ては全然無くなつて來た、そこで一方では、斯う段々營養機關が乏しくなつては生命にも拘はる一大事だといふので、葉柄は段々今日の如く扁平長大して、葉の代用を爲すに至つたのである、臺北苗圃に行つて見ると、今でも尙ほ退化しきらずに、羽狀葉を著けて、昔しの面影を殘して居るのがある、それで古き書籍などを見ると合歡科に入れて居るのも澤山あるが、强ち間違ではない。

原產地は濠洲のフヒジー群島で、我が臺灣に來たのは餘り古いことではないが、深根性にしてよく瘠地に成長し、又よく風雨に堪へるのと、綠葉鬱蒼として天を覆ひ、日光を遮ぎり瘴熱を防ぐの功あるとに依り、道路樹又は防風樹として、今や全島至る所に栽植せられて居るのみならず、其質堅硬にして炭薪の好材料なるを以て山野にも多く栽培せられて居る。

花は全身黃金色にして綿の如き花糸より成れる球狀花で香氣亦頗高い、其花期頗る長く、春より秋に至るまで時々開花するので、花實同時に一枝上にあるのも、奇でにある、但し相思子と稱する蔓生の荳花植物と混じてはならぬ。

▲棉の樹《臺灣名》斑芝(パンチイ)《異名》棉樹、攀支、覇王樹、ばんやの木、《科

名）木綿科

班支は葉柄極めて長き、五個の小葉より成れる、掌狀複葉の落葉大喬木で、優に五十尺以上に達する偉大の木である、斯かる大木なるが故に、よく枝上に鱗甲形の苔類が付着して居るので此名を得たのである、幹には鈍角刺を具へて居る。

此木元來野生にして成長極めて佳良なるが故に、土人は俗に珊王樹と呼んで居るが、普通綠珊瑚をも珊王樹と異名して居るから、混じてはならぬ。

春未だ芽を發せざるに先ち、その形ち山椿に似て、黃色の合瓣大花を開く、如何にも雄大な感じがする、木である、殊に淸國閩粤地方にあるものは皆な深紅色なので、一層艶麗にして且つ壯大の感がある。

實は蒴長二三寸、裂開して絮を吐く、絮に絹光があつて滑澤である、纖維がやゝ短いので糸としては遠く綿糸に及ばないが、蒲團綿としては結構である。

▲臺灣連翹（臺灣名）連翹（レンキヤウ）（異名）。いたちくさ（科名）木犀科

連翹は內地にもあるが、大に其の趣を異にして居るので特に此の名があるのである、其の異なる所は、內地のは一花梗に五六花しか咲かないが、臺灣のは一花梗に殆ど數百花を著け一大穗狀に咲く、其色も內地のは黃色であるが、臺灣のには白と紫とがある、內地のは早春一度であるが、臺灣のは春秋二季に咲く、內地のは落葉するから一の觀賞用は過ぎないのであるが、臺灣のは落葉し

ないから、生籬用木の第一位を占めて居るのである、そして、臺灣のは豆の如き球果を多數穗狀に簇生する、夏季其黃熟したる所も、亦觀賞するの價がある。

▲茄苳《臺灣名》茄苳樹（カタンテフウ）《異名》あかき《科名》大戟科

茄苳は純粹の熱帶植物にして、本島至る所に野生して居るが殊に臺東の山中に多く、其大なるものは高さ十餘間、徑五六尺に達するものがある、葉は心臟形の粗葉にして、稍長き柄を着けて居る、嫩芽赤色を帶ぶるを以てあか木と名くるといふことである。土人は材質堅牢なるを以て一般に良材として稱用し、建築材、器具材、棺材等に用ゆるのである。

▲たうはぜ《臺灣名》栱仔（コテア）《異名》なんきんはぜ、烏臼樹《科名》大戟科

栱仔は熱帶亞細亞原產の濶葉喬木で、葉は卵形にして尖り、柏楊に似て居る、花は單姓黃色の小花で、見るに足らないが、性よく風水に耐るので、田園の防風樹河川の護岸樹などに用ゐられるのである、稀れには庭園にも用ゐられて居るが、兎に角田園趣味の木である。

▲たうあづき《臺灣名》相思子（シウシイツイ）《異名》雞眼子、相思豆子《科名》荳科

たうあづきは本島蕃地に產する蔓生植物にして、葉は羽狀複葉にして、花は小形白色又は帶紅色で蛾形花冠を有して、總狀花序に開くのである、秋小豆大の實を結び自ら決裂して種子を散布す、

其種子の一端鮮紅にして堆朱の如く、そして他の一端は嶄然色を改めて漆黑色を爲して居る所、頗ぶる奇である、子供の玩具又は裝飾品に適す、猶ほ獨乙に於ては貴重なる治眼病藥として用ゐられるといふことである。

▲月來香《臺灣名》月來香（ケエライヒョン）《異名》月下香《科名》石蒜科

月來香は、恰も蒜の如き葉を生じ、夏に至り、其葉叢中より二尺ばかりの花莖を抽き、多數の白花を着け、下より漸次に咲上るのである、花に奇香あれども、其匂ふは唯夜間のみにして、晝は何等の香もない、故に此名があるのである、孫元衡の詩に、

風引清芬暗裏來、素花隱約傍莓苔、貪迎月露飄香滿、更領蟾蜍死魄開

といふのが之れである、八重咲は外苞淡紅にして美である、此花は秋再び咲くのが普通である。

▲桃金孃《臺灣名》水刀連（ツイタウレン）《異名》天人果《科名》桃金孃科

桃金孃の葉は楕圓全葉にして互生じ、網狀を爲さゞる縱橫兩脈を具する奇葉にして、野生の小灌木である、春夏の候白毛を被むれる、蕾を生じ、花瓣の內面紫にして、肉厚き五瓣花を咲くのである、山地の子供等花を賣りに來る序に、根付のものをも持て來るので、よく庭園に植られてあるが、元來をいふと山趣味を帶びた木である、苗圃などにも築地や路傍の芝生の中などに植えてあるのは好配合である。

▲へご《臺灣名》桫欏（ソワロオ）《異名》蛇木、筆筒木《科名》桫欏科

蛇木は本島至る處の山地に自生する木狀羊齒にして、高さ丈餘に達し、羊齒類中一番大なるものである、葉は蕨に似て長大なるもの四方に開展し、每葉の裏面に二三個づゝの子囊を生じて居る、葉柄脫落するや、其痕跡の斑紋奇なるを以て蛇木と名くるのである、春夏の交黃毛を被むりたる新葉を發するが、それが小供の手に似て奇なるを以て、庭園に栽培せらるるのである、內地人は筆筒、花筒などにするので俗に筆筒木とも名くるのである。

▲玉菜《臺灣名》高麗菜(コウレイツアイ)《異名》はぼたん、キャベッ、甘藍《科名》

十字花科

高麗菜は葉々相擁して玉の如くになれる菜で、冬春、其上部の青葉を剝去り、內部の白葉の部分を食するのである、從來內地にては、寒地にあらざれば生育せざるものとして、多くは北海道にのみ作つて居つたのであるが、本島には非常によく生育し、到る處に作つて居るのである、其純白にして人頭大なるものを賣歩行いて居るのは頗る面白い、內地では秋冬の菜にするとあるが、臺灣では冬春である。

▲綠肥《臺灣名》綠肥(リヨクヒイ)

臺灣は暑いので蘿蔔の花も春から咲く、そこで春の田植前になると所々の耕地に綠肥用蘿蔔の花が咲いて居るのも好き眺めである、稀れには豆を蒔いたのもある、豌豆を蒔いたのもある、詳細は冬の部綠肥蒔の條を參照せよ。

夏之部

人事

▲始政紀念日《臺灣名》始政紀念日（シイチエンキイリエンクワ）

明治二十八年六月十七日、臺灣總督府に於て臺灣に於ける始政式を擧げたので、爾來此日を以て始政紀念日と爲し、此日臺灣神社に於て祭典を執行し、總督官邸に夜會を催さるゝ例となつて居る。

▲城隍祭《臺灣名》城隍爺生（シエンテンヤアシイ）

城隍神は其地に德を敷ける名官賢卿を祭りたるものであるから、各都邑にあるのである、各地とも五月十三日に其祭りをすることになつて居る、城隍祭は本島祭禮中盛大なるもの丶一下、奉祀最も

勵むのである、此日は城隍の偶像を舁いて市を巡る、幾萬の善男信女は香を捧げて神輿に從ふ、中には病疾災厄等に罹り、此神に祈願を籠め、之れがために病死災厄等を免かれたとか又は免かれんとするものは、其御禮として、男は關將と稱し、三十六天官、七十二地煞の中の何神かに裝ふため、顏一面に油彩を塗り、女は（男もある）紙製の枷を首に嵌めて居るのである、其形裝噴飯に價す、又擡閣を作り、妙齡の少女に錦繡の衣を纏はしめて臺上に飾り舁いで神輿に隨ふ、外觀頗る優美である、勿論關將とか紙枷とかいふものは、何れの神事にも用ゐられるのであるから、季物とすることは出來ないが、唯臺灣祭禮の一行事としては頗る趣味の多いものである。

▲半年丸《臺灣名》做半年（ツオコボテエイ）

六月十五日を以て俗に半年といふ、此日には各家米粉の團子を作りて家神を祭る、之れを半年丸といふのである。

▲香色《臺灣名》香色（ヒヨンシエク）《異名》香抹、香球

臺灣には五月の節にも、幟りを立てるとか、菖蒲を葺くとかいふことは行はれないが、刺繍の小袋に香粉を入れて、小供の首にかけさせることが行はれて居る、俗に之れを香色といふ、此香粉は藥種店で賣でるのもあるか、多くは暑中伺として呉れるのである之れをかけさせるのは、五月雨の邪氣を拂ふためだといふ、中々風雅なものだ。

▲夏の刈上祭《臺灣名》孝土地公（ハウトテイコン）

稻刈の日に爲す祭である、詳細は春の田植の條を參照すべし。

▲田植祭《臺灣名》孝土地公（ハウトーテイコン）《異名》分秧祭

詳細は春の田植を參照すべし。

▲夏稻刈《臺灣名》夏刈稻仔（ヘエコテウアア）

臺灣の稻は至る所二期作である、尤も南部の一地方には三期作の所もあるといふが、水の都合上から概して二期作である。

第一期稻は三月に植付けて、六月に刈取り、第二期稻は六月に植付けて、十月に刈取るのである、故に前者は夏の稻で、後者は秋の稻である、土人は前者を早稻と云ひ、後者を晩稻と云つて居る、內地で同じく一の秋稻中に於て、僅かに早く熟するものを早稻と云ひ、僅かに晩く熟するものを晩稻といふのとは雲泥の相違であ

る。

内地で云ふ所の早稻晩稻と、臺灣で云ふ早稻晩稻とは斯くの如く其意味を異にして居るので、作句上臺灣人の稱呼を其儘使用するのは、頗る混雜を來すの恐れがあるから、可成第一期稻は之を「夏の稻」とか「一番稻」とか云はねばならぬ、そこで第一期の稻刈は「夏の稻刈」と云はねばならぬ。

▲粟祭《異名》祭祖、靈祭、

臺灣蕃社の祭典は、社に依りて多少の差異ありとするも、要するに粟又は陸稻の蒔付、又は其の收穫の時、祖先の靈を祭るのである、そこで蕃社臺帳の記事には、何れも祭祖としてあるのである、尤も所に依り年に一回の處あり二回の處もあり、四回の處もあり、又は數年目に一回の處もある、又疫病流行などの時には、臨時に執行することもあるが、要するに其の主なるものは粟の收穫時季に於てするのであるから、內地人は俗に之れを粟祭と呼で居るのである、之に依て其時季も亦夏となるのである、其の方法は各社に依り多少異なる所があるから、左に蕃社臺帳の記事を抄錄する。

△宜蘭廳溪頭蕃ピヤナン社《アタイヤル族》

當社に於ける祭祖は一年一回とし、陸稻一收穫を了ると同時に之を爲すも、社內に惡病流行又は不時の出來事發生せし時は之を祖先の靈の祟りなりとし、出草して異種族の頭顱を獲て以て祖祭をなし、之を慰む。

故に馘首の最も多きは此時期なりとす、然して彼等が馘首を遂

げたる時は、其首級に對して人頭祭を行ふ、今同社人頭祭の模様を記すれば、即ち左の如し。

人頭祭は出草一行中にて馘首したものゝ居宅入口に其の首級を吊し置き、男子は馘首者に限らず、何れも室内に入りて衣の新しきものと着代へ、頗る靜肅にして、此間女子は馘首者の母妻姉妹に限り室外に出で、吊し置きたる人頭を清水にて洗ひ、頭髪を梳り出來得る丈け之を美くし、元の儘に直し置き、夫れより馘首者の一行再び集合して、首級を正副頭目の宅及年長者の宅に持ち行くを例とせり、然して終に首級を正頭目宅の搗臼の上に丸木三四本を横へ、其上に置き、男女老幼集合して盛に酒宴を開き、交々首級に粟、及び煙草、酒等を饗す、而して云ふ、

『今回吾々一行が汝に入蕃を勸めし時、汝は遁げ隱れなどしたるも、蕃地は汝等が思ひしより結構なる處であると云ふことを汝も今は定めて覺りたるならん、粟も黍も酒も澤山ありて、少しも不自由なし、依て若し汝に父母妻子あらば、皆之を蕃地に來るよう汝より勸むべし、何れ近々の内案内者として吾々下山すべし』と數回之を語り、以て人頭祭となせり、其後首級を人家を距る十四町の溪谷にある首架に持ち行き、二三ケ月を經て再び持ち歸り、社内にある頭骨架に飾り置くを例とせり《頭骨架の構造は之を略す》

△元深坑蘆屈尺蕃ウライ社《アタイヤル族》

一年一回其收穫を終れば好日をトし祭祖の儀式を行ふ、即ち其

豐穰を祖先に謝し、次回の豐收を祈るものとす。

△同廳後山蕃カラホ社《アタイヤル族》

祭祖の著しきもの二あり、一は粟稗の植付け時にして、一は其收穫の時なり、月の圓形に復せし日をトして祭祖の儀式を行ひ、其年の豐作ならんことを祈り、又は豐作を謝し、祖先の靈を祭る、各社新穀を以て餅を作り、酒を釀し、擧社一地に會し、酒を地に灌ぎ、祖靈を祭りて宴飲歌舞す、凡そ月餘に亘り、逸樂することあり。

△桃園廳前蕃山角板山社《アタイヤル族》

祭祖《蕃語スマト》の時日調度は概ねカラホ社に同じく、其月餘に亘る逸樂の期間内は、異種族の社内に入るを准さず、以爲らく祖靈の譴怒を致すと、要するに邀福避禍、凡て祖靈の冥護によりて得るものと信ずるは彼等一般の通性なり

△新竹廳前山蕃十八兒(シバジー)社《アタイヤル族》

凡そ生蕃の祭典は熟蕃の如く盛大ならずと雖も、毎年粟稗の成熟せし時に於て酒を釀り飯を炊ぎ、各自戸口に並列し、異樣の聲を發して祖先の靈を呼び、以て之を饗すとなす、此祭中には未婚の男女相姦するも決して之を咎めず、之れ祖靈の爲す業なりと信ず。

△新竹廳汝水蕃下蕃(ハロー)社《アタイヤル族》

祭祖は三月若くは十月の頃、各戸餅及酒を製し、菓物穀類蔬菜と共に高處に設けたる祭場に持ち行き、之を供へ、祖靈を祭り

翌日、更に來り、其亡失品を改め、是を以て當年の不作物と見做し、大に祖靈を祭る。

△元苗栗廳合蕃馬陵社《サイセット族》

社内耕作物凶荒減收、或は疫病流行に際しては一般生蕃に同じく、祖靈が久しく食に餓えたる結果なりと信じ、殆んど二年乃至三年に一回馬陵篆を祭る、即ち當日は各戸少量の酒肉を携へ、崩山下と坑頭との中間に位する高山に登り祖靈を祭り、更に轉じて衆蕃土目の居宅に集合して酒宴を開く。

△臺中廳南勢蕃阿冷社《固有社名 Meshieya メシエヤ》《アタイヤル族》

靈祭《蕃語メシヤト、又はミエイリヤツハ、或はシエラツカ》と云ふ語に限り、其方言を異にす、阿冷社の如きは「シユーラツカ、又はシソヤト」と云ひ、白毛社、稍來社、油竿來完社にては「メエイリヤツハ」と云ふ、靈祭は毎年二月上旬より中旬間、及粟の收穫期即ち七月上旬又は中旬に於て施行す、此時彼等は互に身體を清淨にし、衣を更へ其近親緣族知己各戸日時を同ふして酒を釀し、餅を舂き、雞を割き、鹿猪羊豚の肉を煮、其少量を各個に山芋の葉又は芭蕉の葉に盛り、酒を竹筒に入れて棚上に置き、他の酒肴は其日の午後四時頃より互に贈與し、徹夜酒を呑み、而して翌日曉天未だ物色を辨せざる時、各戸の青年又は壯丁等は、前日盛並べたる酒肴を戸前に置き、大聲祖靈に告ぐる要項左の如し。

一靈よ來りて此の酒と餅とを食へ、
一先祖よ來りて此酒と餅とを食せよ、
一父よ來りて此酒と餅とを食せよ、（父を亡ひたるものに限る）

（右の如く招致する靈は祖先累代の靈のみにあらず、滅き來りし異種族の靈もあり）

上の如く靈を招き、又自己が將來の希望を述ぶるの辭に曰く、

一吾等に幸福を得せしめよ、
一來る年の耕作物は豐饒ならしめよ、
一吾等をして病に罹らしむる勿れ、
一吾等の狩獵に多くの獲物あらしめよ、

一吾等に事ある時は首級を得せしめよ、

再三連呼して四圍の光景稍物色する頃、各自己が豫定せる附近の林叢中に前記の供物を運び、之を地上に列置するや否や、後方を顧ずして疾走家に歸る、而して林中に殘せる供物、殘留せざれば即ち靈顯の著しきものとせるも、近時に至りて、彼等も彼の供物は或る動物の食ふものとの考を有せり。

△南投廳南蕃、干卓萬（ガンタバン）社、《ククス社ヴオヌム族》

祭祖は米粟の下種及收穫後二回に執行し、儀式は土目の家にて行ひ、擧社會飲す、當日は酒を地上に灌ぎたる後、酒を濾せし粕を各蕃丁一握し、二十餘名の二隊を爲し、一隊は屋上に一隊は地上にありて、相互合圖をなし、兩方より投じ、其豐穰を祖

先に謝し、尚翌年の爲めに祈る、之より痛飲し、合酒の禮あり、醉後壯丁は各角力を試みるの慣習あり、從前は此時首級を供へ、異人種の入社を禁じたるも、今は其風を絶てり、祭典の期日は一定せず、酒を釀造し終りたる時は頭目より通知するものとす。

△同廳濁水蕃巒大社《ヴオヌム族》

祭祖を粟の下種期及收穫の際に於て行ふは各社同一、其の日土目の家に於て草束を上座に結び懸け、祖靈の來り臨むの位置とし、粟餅と酒を製し、土目先づ右手の食指を酒に浸し、拇指にて地に灌ぐこと三回なり。

△阿緱廳傀儡蕃サンリラウ社《ツアリセン族》

彼等は年に四回祭祖を行ふ、祭典中は「バリシ」と稱し、祭祖期間は、社内に異人種の入るを許さず、又彼等も社外に出るを欲せず、一粒の粟一滴の水をも社外に出さゞる例なり、祭祖期は粟及芋等の播種及收穫を了りたる後、月の圓形なる日を卜し十日乃至四十日間之を行ふ、而して其期間の盈つるに及びて此の禁を解く、彼等は三年乃至五年に一回社の大祭を行ふ、大祭は三日乃至一週間を以て了る、此祭典の祈禱所と稱して、高さ五尺巾一尺五寸位の直徑十尺の圓形櫓を築造し、元口三四寸直徑長さ三十四五尺の竹を各自一本宛携へ其櫓上の板に腰をかけ、竹を眞直に保つ、而して櫓の中央に一人乃至二人直立して、木皮を以て造りたる鞠に、約三尺位の紐を付し紐の一端を持ち、鞠に動力を加へ空天高く之を投げ上ぐ、其れを周圍の蕃丁竹にて受

止む、其竹尖に多く止まりたるを以て最吉兆となす、斯て同一の事を爲すと、終日彼等は此の祈禱事を爲す間、不絶神歌を唄ふ、祈禱中は女子と言語を交へず、何れも齋戒沐浴して頭髪を背部に亂垂し、白衣を着す。

「バリシ」なる語の意義は齋戒秡除、若くは禁壓と云へる意を含む、祈禱檜は社の大小によりて其數差あり、大社は五六ヶ所、小社は一二ヶ所に止まる。

△阿緱廳ぱいわん蕃たなしう社《バイワン族》

祭祖は祭公頭（パラカフー）なる者ありて、之が月日を定め、社内に通知するものにして、毎年七八九の三ヶ月間に之を執行するを例とす、其儀式は草葉に豚肉及び餅を飾り、其上部に豚骨を刻りたる粉をかけ供するものとす。

△同蕃ぶつんろく社《バイワン族》

祭祖としては記すべきなきも、祖先墳墓の地と稱し、社毎に一の樹林ありて、其靈を祀ると云ふ、是に對する祭事は五年に一回あり、社内に於ける大祭事なりとす、又毎年一回祭事を行ふも、祭神なし、只一年間に於ける吉凶を卜するに過ぎず、此吉凶占に對する祈禱者の言は、絶對の奇力を有し、今年は馘首少きため不作なり、明年は多く馘首せざれば一層の不作を招くならんなどゝ言へば、一般に迷信して祈禱者の言の如く實行すと云ふ。

△恒春廳恒春下蕃竹社《バイワン族》

祖先の靈を崇敬するの感念深く、毎年粟の播付及刈入のときを

以て祖先の祭典を擧げ、粟播の祭は二三月頃にして、蕃名「チモゴトバアコ、バリシン」と稱し、社中の男子擧て出獵し、歸れば其獲物及餅豚肉等を供へ、祖靈を祭り、豊饒を祈り、男女相集まりて宴飲す、翌日畑に到り、粟播を行ふ、粟刈の祭は七八月頃にして、蕃名「バチヤラ、バリシトバアコ」と稱し、粟を刈入れし後、一定の地に一宇の茅屋を築き、内に弓矢及古鐵器を納め、此處を以て祖靈の來降する殿堂とす、社中男子土目の家に集り、一夜宴飲し、翌曉未明に、土目は鎗を立て、社蕃之に隨ひ、茅舍の前に到り、祖靈を拜し、山中一定の地に集り、各自携帶の銃器を排列し、巫女をして銃に向て祈禱を捧げしむ、之を了らば、擧て狩獵に赴き、凡そ三四日を經て社に歸り、穫物及餅粟酒等を茅屋の前に供へ、新收を謝し、尙來年の豊穣を祈る、斯くて宴飲終日にして止む、此外五ヶ年毎に一回の大祭あり「マジユボク」と稱し、上記收穫祭と大體に於ては同樣なれ共、草蔓にて鞠を作り、之を投げ、竹鎗にて突き止むる古例あり、此の祭中は十日乃至半月に亘り、酒肉を備へて隣接各社の親戚知友を招きて饗宴す。

△臺東廳七脚川社《アミス族》

祖先を蕃語「トアス」と稱す、三年毎に大祭を行ふ、當日は社内の「シカワサイ」なる巫覡悉く來りて祈禱を爲す、其時季は作物の收穫後即八月頃にして、社の入口出口に設けられたる「アラワン」なる集會所に於てするを例とす、祭祖の目的は當年の

豊作を祖靈に祈るにありて、社内擧て新酒を醸し、豚を殺して集會所に集合し、酒を祖靈に捧げ、又新餅を製し、之を圓形に作り、茅臺の上に列ねて祖靈に供し、了りて擧社會飲歌舞夜を徹するを常とす。

△臺東廳秀姑巒阿眉蕃奇密社《アミス族》

祭祖は一年四回にして、粟播（マサウマ）粟刈（ミハバイ）粟の收穫を了せし月の滿月前後、及稻收了の時期是れなり、而して粟收了の祭祖を尤も大切なるものとす、是れ越年（イリシン）の期になすを以てなり、其儀式の順序左の如し、（此粟播收の期日を定め及祭主となるは頭人の任務なり）

イリシン（粟の收穫を了せし月の越年祭）の儀式。

初日、「ミアロプ」と稱し狩獵をなす（從前は馘首の爲め出草せし日なり。

二日目、「ミサロコ」と稱し獲得の首を架上に祭る（現今形式に止まる）

三日目、「ミタナム」と稱し少年蕃飲酒の競爭をなし强飲者を以て勇敢となす。

四日目、「タラパヲル」と稱し頭骨架の修繕を爲す。

五日目、「パコモラン」と稱し馘首踊りをなす、其狀普通阿眉蕃人の舞踏と異なる所なし。

六日目、大に會飲す。

▲夏稻打《臺灣名》夏棟稻（エサクボウ）

稻に關する諸季題中、內地と臺灣とに於て最も其の趣を異にして居るものは、彼の籾の落し方である、元來內地の籾は非常に能く穗に喰著いて居るから、稻扱にかけて扱落すより外はないのである、歲時記にも、

古は麥稻の穗を扱くに、二つの小さき管に繩を通して繫ぎ、之れを握持ち、穗を挾みて扱く、近年稻扱を製す、其捷きこと扱竹に十倍す。

とありて、內地では昔しから扱いたものであるらしい。

然るに臺灣の籾は著方が非常に脆いので、決して扱くには及ばない、稻打道具の上に一寸打付ければ忽ち落ちて仕舞ふのである、そこで臺灣では一人が稻を刈れば、一人は其側に大いなる棟桶と稱する籾入桶を据付け、其向ふ及兩側の三方に笊仔と稱する古蚊帳樣のものを帆布然と張廻はして、籾の飛出さない樣にし、中に桶梯と稱して、梯子の縱木の多い樣な稻打道具を置き、稻の穗を之に打付けて落して居る、土人は之れを束稻と云つて居る、棟とは打つといふ意味らしい、本意義は押すと訓するのである、其體裁たる全く內地の麥打と一般であるから、之れを意譯して稻打ちと云ふたならば一番適當なのである。

▲蛙捕り（臺灣名）拿水雞（リャウスイコエ）

蛙は臺灣料理中缺くべからざる一材料である、其料理を炒水雞といひ、宴會の最終には必ず出すべきものとなつて居る、其材料は雨蛙、疣蛙の類を除く外普通田や川に居る蛙を用ゆるので、夏の

初めになると、田圃に捕りに出かける、小供などは盡も捕りに行くが、普通は、夜、カンテラを點じて捕りに行く、即ち蛙の夜振りであつて、頗る趣味の多いものである、寧ろ捕るよりは、それを遠くから見る方が尙ほ趣味が多い。

▲夏帽賣《臺灣名》賣帽仔（ボイホウアテ）

例の大甲蓆は藺で編んだものであるが、其藺を原料として夏帽子をも編む、大甲で製造するので大甲帽といふ、林投帽に比すれば稍〻黑を帶びて居るが、其代り變色することはないものである、夏になると土人が其帽子の行商に來る、其帽子賣は目印のために賣物の帽子を十個位、重ねて自分の頭上に戴いて居る、頗る滑稽風俗である、新商法には相違あるまいが、領臺後頻りに徘徊するから一季物としてよからう。

▲簟賣り《臺灣名》賣竹席（ボイテクチヨ）

臺灣は竹の産地で、其良材が多いのと、熱いので、夏の敷物には簟か最も適當するのとで、夏の初めには頻りに簟賣りが徘徊する、そして此行商人は、敷寢用の分は一尺四方位に疊んで、風呂敷か何かで背負ひ、坐蒲團用の小物は卷いて手に持て居る、それは看板用旁手に持て歩行くのである、各種の行商人中、一寸異彩を放つて居る。

▲龍骨車《臺灣名》龍骨車（リエンクツチヤア）《異名》水車

龍骨車は一種の揚水器にして、夏時、用ゐて以て田に灌漑用水を汲揚ぐるのである、內地の灌水用踏車と同一理のものであるが、

其形狀が全く異なる、即ち一尺四方、長さ丈餘にして底なしの箱と、簡單なる跡車と、連鎖との三者よりなるものであつて、其車軸には簡單なる四條の踏木二人分と、齒車とあり、連鎖は五寸ばかりの木片を扇由自在にして、龍骨狀に連續せしめ、其每片に角板を鍔狀に篏めたるものである、之れを使用するには、先づ其箱を堺圳の土手に立懸け、其土手の上に車臺を植付けて、其上に踏車を載せ、其上に踏手の寄木を鳥居狀に立て、連鎖を箱の內を通して齒車に懸けるのである。

斯くして車の踏木を踏めば、其の動力に依りて齒車は回轉し、之れに依りて連鎖の一方は箱の上を下り往き、戻りには箱の中を通りて、其鍔に水を湛えて上り來り、土手の上に至りたるとき、其水を田の中に吐くのである、油の注ぎ方が足りないので、よく音響を發する、其音たるや如何にも旱の感に堪へぬのである、多くは一車を二人で踏むの例である、夏日炎天の際には、よく日傘を寄木に結付け素裸で踏で居る、田園の風致を發揮して遺憾なしちや。

▲楊水車《臺灣名》楊水車（ユウクイナヤ）《異名》ホヲ水車

楊水車は竹製にして徑五六尺乃至丈餘の、簡單なる大水車にして、其側面に二尺ばかり每に竹筒を付け置き、水力に依りて車の回轉するに隨ひ、自然に水を汲み上げて田園に灌がしむるものである、名に聞く淀の川瀨の水車と同一理のものである。

▲大甲蓆《臺灣名》太甲蓆（タイカヂナヨ）《異名》太甲藺蓆

大甲蓆は大甲街附近に産する、沙草科の一種、三角藺にて編みたる蓆にして、大甲藺蓆の略である、蓆は枯藺其のまゝの色なるを以て、色彩の稱すべきなきも、土人の手編みにして、手觸はり滑かに、頗る雅致ある夏季の敷物の一である、敷寢用、座薄團用等種々ある、何れも線の細きを以て上等とす。

▲太甲帽《臺灣名》太甲帽仔（タイカアボオアア）

太甲帽は太甲藺にて編み、パナマ帽に似て色稍黑きもので、本島太甲の特産である、夏用帽子には妙である。

▲林投帽《臺灣名》林投帽（ナアタウボオ）《異名》淡水帽、臺灣パナマ

林投帽は林投の葉を漂泊して編みたる夏帽子にして、其色純白滑澤、一見パナマ帽と異なる所はないが、唯其質粗惡にして、變色し易く、且つ洗濯することの出來ないのを異なりとするのみである、そして其の廉價なるがため大に愛用せられるのである。

▲茎萊布《臺灣名》茎萊布（オンライボオ）《異名》葛布

茎萊布は木布の一種にして、茎萊即ち鳳梨葉の纖維を以て織りたるものにして、土人は用ゐて以て夏服となす、其の生平は稍黃色にして且つ硬く、全く內地の黃帷子の如く、練りたるものは純白にして麻布の如く、共に內地人の夏服にも適當するものである、臺灣人は一に之れを葛布とも云つて居る。

▲家鴨の孵化《臺灣名》孵鴨仔（ブウアアアア）

本島には家鴨の飼育最も盛んにして、郊外一歩を出づれば、何れの處か之れが放養を見ざるの地はない程の有樣なのである、そし

て其雛鳥は皆な人工孵化に待つのであるから、孵化の業も亦頗る盛んなのである、之れを孵化するものは、何れも一の營業として居つて、其の大なる孵化場に至ては、一ヶ年優に十萬羽以上を孵化せしむる所ありといふ。

其孵化法は、先づ孵化籠に麻布を敷き、穀大麥を炒りたるものを入れて温床となし、之れに卵を入れ、更に麻布を掛けて適度の温熱を與へ、以後毎日朝夕二回づゝ、他の温床を新たにしたる籠に移し替へ、其都度上下の孵の位地を顚倒且つ循還せしめ、十五六日にして、更に大麥を去り、其後もやはり朝夕二回づゝ卵を入替へて、位地を循還せしめ、毎個の位置をも顚倒せしめ、斯くすること五六日、即ち前後通じて二十日にして、後ち平籠に一づゝ並て、蠶棚の如き棚に挿し置き、尙ほ毎日二回づゝ卵の位地を循還顚倒せしめ、斯くすること十日、即ち前後通じて三十日にして孵化するのである、尤も酷寒のときは、籠と籠との間に火鉢を入れて適度の温度を與ふることもあり、又酷暑のときは、温床は麻布のみにして、全く炒麥を用ゐざることもある、そして四季孵化することを得れども、夏季が一番容易なので、隨て一番多いのである。

▲茶選女（臺灣名）揀茶工（キエンテエカン）

揀は選ると訓し、揀茶工と云へば茶選女の義である、本島の茶商は、農家に於て粗製したる茶を買入れ、之れを精製するため、女工をして其内より古葉や棒を拾はしむ、之れを揀茶と稱し、其女工を揀茶工といふのである、其の方法たる五尺ばかりの圓い平籠に、

二三貫目づゝの粗製茶を入れ、其周圍に三四人づゝの工女寄集りて拾ふのであつて、其數たる頗る多く、而して之れが本島唯一の女工である、其の喃々として談じ、蹣跚として働く所又是製茶場裏に於ける一種の花である。

▲木藍刈り（臺灣名）刈大青（コワトアナイ）

木藍は本島に於ける主要の採藍植物にして、壤砂地域一般に栽培せらるゝ荳科植物である、木藍は三月に播種し、九月に至りて第一回刈取りを爲し、翌年六月及び九月の二回刈取りを爲す、即ち一度蒔きたるものは、都合二年に渡り三度刈取りをして、一期とするのである、木藍の條を參照せよ。

▲洗濯（臺灣名）洗衫（ソエサン）

池沼河川の邊り、さては泥溝汚瀦の傍、苟くも水の滙溜する所には、必ず婦人が洗濯して居る、中には老人もあるが、多くは少婦である、醜美混淆、貧富雜處、或は喃々として痴を語るもあり、或は娓々として情を說くもある、笑言冗語、喧囂を極むる樣、所謂臺灣的井戸端會議の趣味は此處にあるのである、若し夫れ驕陽威を弄し、炎熱爍くが如く、流汗衣を濕ふすの時に至れば、此の異俗は一層盛に演ぜらるゝのである、觀風仙史詩あり曰く。

偶題五首　　觀風仙史

三三臨碧水。纖手濯來輕。半是貧家婦。浣衣送此生。
炎日射沙石。蒸蒸熱氣流。紅顏汗似玉。心上却爲秋。
阿郎何處在。三歲冷空幃。聞說新人艷。妾今浣故衣。

垢衣猶可濯。石上思悠悠。江水清如許。爲予不洗愁。
蓬髮水爲鏡。澣衣趁苦辛。好描將一幅。寄與玉堂人。

と、又是れ臺地の一特風である

▲養魚獵《臺灣名》拿堀魚（リヤウウンヒイ）

養魚地の魚は大抵夏季の漁業不振の時に捕りて賣るのである、鹹水池のでも淡水池のでも大抵は水の增減自在に出來て居るから、其の水を引かせて網で捕るのであつて、頗る容易に捕れるのである。

▲日射病《臺灣名》熱（ヂエッチエン）症

熱き日光の直接射照を受くるより生ずる病氣で、劇しき頭痛、眩暈、無知覺、氣絕及び痙攣等を起すのである、多くの場合に於て急激にして數時間にして死するもある、熱射病も亦症狀は之れと同一なれども、單に生體の過熱に依て生ずるので其原因を異にするのである、二者共に其手當は冷水灌法、冷浴、氷囊、等にて、熱を奪ふと同時に、一方より葡萄酒エーテル樟腦等にて盛に元氣を奮興せしむるにある、何れの地にても夏日炎熱の時は此病に罹かるものがあるのであるが、臺灣は熱帶地だけに此病にかゝるものも多いのである。

▲痲刺利亞《臺灣名》寒熱（コウジエッチエン）症《異名》乞食症、瘧間歇熱、

痲刺利亞は廣く蔓延せるも、殊に熱帶地に多き特種の傳染病にして、病原をマラリヤプラスモヂユムと稱し、下等動物に屬す、此病原體アノフエレスなる蚊の媒介によりて人體に侵入し、血液內に於て發育する時は本病を起すのである、初め惡寒戰慄を以て高度

の熱を發し、劇甚の頭痛、腰痛、四肢及び關節痛あるも、數時間の後、多量の發汗と共に解熱し、諸症狀も亦多くは消散す、然れども一定の間歇を經て、更に發熱すること前の如し、本病に三種の區別あり、三日熱、四日熱、熱帶熱之れである、三日熱は隔日に、四日熱は二日の間歇を以て反覆し、熱帶熱は毎日なるあり、隔日なるあり、或は其熱稽留して久しく下降せざるありと雖も、皆一定の熱型を有す、此熱型の一定せるは病原體の發育と一致するが爲めである、本病には適當の時期にキニーネを用ゆるときは之を頓挫せしむることを得、此病は四季共に發生するが、晩夏の候を最も多しとするのである。

▲臺灣赤痢《臺灣名》痢病（リナビン）、痢症（リイチエン）、紅痢（エイリイ）《異名》熱帶赤痢、地方性赤痢

赤痢は、アメーバと稱する下等動物に因て起る一種の傳染病であるが、傳染力弱きを以て、普通赤痢の如く流行狀を呈せず、多くは散在性に發生するのである、其の狀態は、糞便中に粘液及び血液を混じ、輕症は一日に二三回の下痢に過ぎないが、重症は數十回に達することがある、そして不正熱發、下腹痛があつて、甚しく裏急後重するのである、本病は一般に熱帶地に多いのであるが、臺灣には殊に多いのである、そして晩夏より初秋の候に多いから、時季の上よりすれば夏のものとなるのである。

動物

▲水牛（臺灣名）水牛（スイギウ）（種屬）偶蹄、反芻類、洞角科、

水牛は古來支那で牦と稱して居る、本島の水牛が支那人の輸入にかゝることは、舊記と共に疑なき所である、蓋し本島水牛の祖先は、印度水牛から出たものであるからして、其の外貌も頗る類似して居る。

水牛の毛色は灰黑若くは黑色で、尾は暗色毛に淡色毛を交えて、全身一樣でない、前體特に頸部の毛は黑色で、軀幹部よりは密生し、背部には黑褐色の毛を僅に粗生するばかりである、殊に後體又は尾の如きは、夏期になると全く禿脫するのもある、皮膚は厚く、背及び腰部は黑色で頸下綠及び腹部は淡桃色である、頭は細長く額は比較的短かく、鼻骨は狹く、口は廣く耳は長大で、後方に回つて居つて、決して直立することはない。眼は稍小で鋭敏でない。角は黑色で外後方に向つて彎曲し、半圓狀をして、基部の三分の一乃至三分の二は壓偏せられて、略三角形を呈し、前面には波形をした、環狀皺襞があつて、後面は稍平滑で、上部は滑澤にして圓い、鬐甲は肥大して薦より稍低く、前胸は大いに發達し、肩は長强で筋力に富み、脊腰は低く、腹部は膨大して居る、脚は割合に强大で、蹄は濶大にして薄く、よく濕地を歩行するのに適してゐる。

水牛は黃牛に比して怜悧であつて、且つ奮怒する時は危險が多い、然かし又愛情は濃厚であつて、牧童は之を愛すること犬の樣である、又平素見馴れぬものを見る時は、奇異の聲を放つて鳴き、或

は之を襲撃することがある、又頗る水を好んで、陽熱酷しい時には、常に泥中に轉んで、全體に泥を塗り、或は水に沒して、頭若くは鼻のみを水上に出し、數時間に亘ることがある、之れ水牛の名ある所以である。

此の如く水牛は怜悧であつて、且つ水を好むからして、古來雨量多き地方、又は米作地方で、灌水後の犂耕に最も適して居るから、之を飼育することは牛よりも反て盛んである。（主據藤根技師報告書）

▲穿山甲《臺灣名》喇鯉（ラリイ）《異名》喇魚、鮫鯉、龍鯉石鮫魚、石鮫《種屬》貧齒類、食蟻科

形、鰐魚に類するも、口は小にして普通獸類の樣で、鼻部は前方に凸出し、前肢は短かいが、趾にある爪は長大で稍外方に向つて居て、穿穴するに適してゐる、體長三尺餘に達し、全體に覆瓦狀に排列する爪狀の硬鱗を被つてゐる、然かし腹部には鱗なく、只硬毛を粗生してゐる、敵に逢へば直ぐに體を捲縮して鱗を聳立し、其の難をさける手段をする、齒は頗る不完全で、齒根なく、琺瑯質も被て居らぬ、從つて更齒することもない、舌は細長で、蚯蚓の樣で、伸縮自在である、これから粘液を分泌して、巧に蟻其の他の昆虫類を誘引舐食して生活してゐる、多く東印度及亞弗利加に產す（曾田動物書抄出）

世人は此の穿山甲を「ありくひ」と云つて居るが、尙は一つ之とは似て非なるものがある、それは南亞米利加の熱帶地方に產し體の

全長六尺ばかりあつて、全身に毛を覆ひ、長き尾に長毛を生じてゐる、口吻は尖り細長い舌を伸出して蟻を舐食する、普通「おほありくひ」と云つてゐる、（百科辭典）

斯くの如く蟻喰には二者あるが、臺灣に產するものは蓋し其の前者である、そして臺灣產のものに付ては白楚衍の『穿山甲說』に詳細があるから左に抄出する。

穿山甲、本の名は鮫鯉、土人音を訛り、喇鯉と爲す、李時珍が曰く、其形鯉に似たり、陵に穴して而して居る、故に鮫鯉といふと、而して俗に穿山甲と稱す、然れども本草圖經には亦曰く穿山甲は本島唯藥用として始めて穿山甲と稱す、郭璞賦に之れを龍鯉といふ、臨海記には、石鮫魚といふ、尾刺三角菱の如きを以て、故に石鮫と名くるなりと（中略）

臺灣全島到る處皆產す、而して深山大谷を多しと爲す、土人常に山に入り、地を掘つて之れを取る、泥土の墳起隆たるを見て其の處在を識る、或は霖雨久しく作し、巢穴水漲れば、其の出づるを俟つて之れを獲、蓋し此のものたる、山居して而して穴處するものなり、而して臺南廳下に唯山地一帶に之れあるのみ。

性能く動き能く竄る、陸に能く水に能し行くこと龜に類して疾迅なり、每に日間出で食を覓め、食を得て後は則ち水に入つて游泳し之れを食す、食は螻蟻或は蟯蚊の屬を以て糧となす、其の食を求むるの方、甚だ巧にして而して狡、每に穴を出て、山

地或は近岸に於て、鱗甲を開張し、舌を吐き、詐て死狀を爲し、蟻を誘て之を食す、或は蟻蝼蚊蠅の其の身に羣攢するに任かせ、鱗甲を緊閉し、水中に竄入す、鱗甲一たび張れば蟻及蠅蚊は水面に羣浮す、乃ち舌を以て之れを舐食す、故に其舌獨り長し、蓋し此の作用のためのみ、俗諺に「假死鮫鯉、食蟻蝼」の語あり、以て人の內奸險にして外撲拙なるものに譬喩する也(中略)土人は其の皮甲を以て種々の藥用に供し、又其の肉を煮食するものあり、能く熱毒を清解すといふ、毎に山民捕獲すれば、來て城市に賣る、若し購はんとするものあれば、必ず多人を集めて、以て一時に分售完畢すべきを計り、乃ち宰して之を鬻ぐ、價値甚だ昂がらざるなり(下略)

▲土番鶩(臺灣名)土番鶩(トオホワンブウ)(科名)扁嘴類鳧科

大稻埕邊にて人工孵化になる鶩雛は、主として嘴鶩及び土番の二種である、嘴鶩は一に高洲鶩とも云ひ、又土語で菜鴨とも呼ぶ、南清地方の產を直接輸入(ムカ)して飼育したものらしい、其の外貌及び羽毛、體量等に至るまで大要內地に飼養して居るものと略同種類であるが、土番鶩と云ふのは、一種獨特の鶩で、嘴鶩の雌親と彼の成長旺盛にして且つ交尾力の强大なる正番鶩の雄親との雜交によつて出來た一代雜種であつて、其の成禽の後は、體量(ボダ)と肥肉との大なること親禽たる嘴鶩及び正番鶩の遠く及ぶ處でない、そこで肉用專門として作出されるのである故に、土番鶩は全く生殖力を有せざる唯一代限の雜種で、彼の騾馬と共に珍らしくも亦哀れな

性質のものである。

▲三光鳥《臺灣名》長尾三娘（ツンボエサンニウ）《異名》やまむすめ、さんくわう、臺灣三光鳥、山鵲《種屬》燕雀類鶲科（ヒタキ）

形狀鵲に似て頭白く、頰の下部に黑き毛あり、脊は淡紫色にして翅は淡藍色に白斑を帶ぶ、尾は二條甚だ長く、淺藍色にして端白し、嘴尖りて赤く脚赤く、爪黃色である、其艶麗なる所蓋し山娘の名を得たる所以である。

日本益鳥圖譜には「三光鳥は食虫性で、春季本邦に渡來し、殊に山中に多く、夏月中楡梢に於て、樹皮枯草蘚苔蛛線等を以て巢を營み、產卵す、俗說に此鳥の鳴聲月星日と聞ゆるが故に三光鳥と名くる由、秋季に至れば本邦を去り、支那の沿岸を通過して馬來半島に達し涉冬す」（鶲科＝竹林鳥科）とあるより見れは夏季には內地には內地にも來るものと見える、本島には越年するものもあるが、やはり夏が多いのである。

▲信天翁《臺灣名》釣魚翁（チョヒーアン）《異名》ばかごり、あはうどり《種屬》長翼類、信天翁科

嘴は銳く鉤狀で頭よりも長い、脚の前三趾は蹼を以て相連綴してゐる、體羽は白色だが、翼はやゝ黑い、尾は短かく、翼は非常に長く、其の末端は尖つてゐる、これを開張すれば一丈餘に達するものがある、飛翔力の强大なるを以て著名である、遠く大洋の外に飛び、空に懸ること久しきにわたるとも、更に疲勞の樣子もない、特に暴風の時は其の飛翔が一層巧であつて、双翼を開張

したばかりで、悠然として天空に懸ることが出來る、性質名稱の如く魯鈍で、且つ貪食である、其多くは太平洋に產し、噴火を以て有名なる彼の鳥島は、殆んど此の鳥の巢窟である、此の鳥の羽毛は軟かくして彈力に富んでゐるから、褥用に供し得られる。(普通動物の觀察抄錄)

本島にも平常は居らぬのであるが、夏の產卵季になると產卵のためにやつて來る、基隆沖の一孤島アヂンコートは其の產卵地として有名なのであるが、近來燈臺工事のため渡航者の多いので、追々に減少する模樣である。

▲守宮(臺灣名)善人(シエンラン)(種屬)陸棲爬蟲類

守宮は形蜥蜴に似、扁平にして尾短く、皮膚は普通壁色であるが、其性最も保護色に富み、白壁に住むものは白色玲瓏となり、黃壁に居るものは黃色となり煤壁に居るものは煤色となるを以て、其色殆んど一定し難し、眼と口とは稍大く、紳縮自由なる舌を有し、前後一對の肢に各五趾あり、其先扁平にして、裏面に橫皺あり吸盤の用を爲し、天井裏でも走ることが出來るのである、常に人家又は墻壁などに棲みて昆蟲類を食とするのである。

臺灣北部に居るものは鳴かないが、南部に居るものは夜中雨蛙の如き音を鳴く、晝は潛で居て、夜虫を捕りに出る、天井裏に倒に佝匐つて居て、虫に飛付くので、時々座敷に落る、非常に高い音がする頗る氣味の惡るいもので、非常に人に嫌はれて居つたが、此虫原來無害なるのみならず、虫類多き臺灣に於ては、種々の虫

を捕食するので、非常な益虫である、との菜混虫博士の調査書の發表せられた以來、稍其度を減ずるに至つた。

▲白蟻《臺灣名》白蟻(ペセヒト)《異名》飛蟻、羽蟻《種屬》蟻類

朽ちたる木の内に生じ、晩春より夏にかけ、交尾のため四翅の羽根を生じて、空中に飛翔す、靜止の時はこれを背上にたゝみ、初めは白く、後黄となる、老ゆれば後、翅を脱し、地上を行きて死す、臺灣の地、白蟻殊に多く、衣類書籍の如きも一旦之れが巣となるときは、數日にして喰盡され、殊に建築材料中、松材最も付き易く、松材を用ゐたるものは如何なる高所にあるものと雖も、數年にして其害を被むらざるはなしといふ、白蟻は固より内地にもあるのであるが、臺灣には種類も多く殊に其害が多いので、再び茲に記して置く。

▲鰹(シイラ)《臺灣名》鬼頭魚(クイタツヒイ)、大尾魚(トアボエヒー)《異名》九萬疋(クマヒキ)《種屬》鰹科

鰹は體甚た長くして薄く、大さ三四尺許り、頭方にして、背部は淡苔色に微黑を帶び、腹部は銀白色に微黄色を帶ぶ、體の兩側には藍色の斑點列り、其大なるものには頭部にもある、常に大海に住めども、性音響を好み、之れを聞きて群來す、夏季産卵に際しては陰翳を好みてかくる、漁人は之れを利用して捕獲するのである、其來るや數萬群を爲して來るを以て、俗に九萬疋とも云ふのである。

▲夜光貝《臺灣名》螺(レエ)《種屬》螺類或は腹足類

螺は本島の南部に多く産する貝類で、常に沿岸岩礁の間に棲息し

居り、三月より九月迄に産卵するものである、漁夫等は夏季海上平穏の日に、水中に潜つて之を採り、肉は炙乾して食用に販賣し、殼は裝飾として販賣するのである。

▲正覺坊《臺灣名》龜《種屬》爬蟲類

正覺坊は恒春の東海岸に最も多く産し、普通其甲四尺位大なるものは一坪位のものもある、六七月の孕卵期になると、夜間砂上に上りて産卵するから、それを捕るのであるか、之れを捕るには、其足跡を追つて行つて、手捕にするのである、若し龜が居なくとも足跡の終點の砂を掘れば、卵たけは必ず得られるのであるから頗る滑稽である、肉及び卵は食用となし、肝臟の油は燈用として販賣するのである。

植物

▲扶桑花《臺灣名》扶桑花《異名》りゆうきゆうむくげ、佛桑花、臺灣牡丹、花上花《科名》錦葵科

扶桑花は一つの看賞用常綠灌木で、種類は頗る多いが、花形を異にするのみで、葉は何れも、不整齊なる鋸齒狀を有する軟葉互生し、一寸見ると桑の木に見える。

一、八重咲　八重咲の内にも紅、樺、黃、淡紅等種々あるが、何れも芙蓉の八重咲の如く縮くれ重瓣の大輪花を葉脇に著ける所、頗る人目を喜ばしむるに足る。

一、風鈴咲　朱花五瓣なれども、其瓣裂けて數十片となりて、八

重咲の如く外反す、細くして長き花梗は、此大輪を捧ぐる能はずして、彎曲垂下すると、更に其中央より蕊柱長く垂下して、其先きに穂狀の小蕊を生じて黄粉を付く、其狀恰も風鈴の如くなるを以て此名を得たのである。

一、大輪咲　紅色五瓣にして、其大なるものは五六寸に至る、蕊柱長く斗出して黄色を帶び、其花瓣と相映ずる所、頗る美觀である。

一、黒葉　葉に紫黒色を帶ぶるが故に此名あり、花は眞紅五瓣、扶桑花中の奇種である、扶桑花は何れも多少四季共に花を有するのであるが、其最も盛なるは、夏秋の間である、故に季題としては夏季とせねばならぬ。

范浣浦の詩に

秪是江鄉木槿花。千尋照殿炫紅霞。生來不過繁霜雪。穠艷經年向客誇。

桃腮杏臉攪朝霞。那信紅顏薄命嗟。兩樹新粧爭覩勝。老夫無月不看花。

と云ひ、孫元衡の詩に

燒空處處佛桑燃。寒燄花魂總放顛。大海東頭當時曉日。丹山脚下對晴烟。眼明五月朱榴火。泪一濺春紅杜鵑。粉白嫩黄相映發。遙情將向洛陽天。

といふのは是れである。

日傘被し名殘話頭や佛桑花

▲茶蘭《臺灣名》茶蘭（ナエラン）《異名》金粟蘭、孩兒菊、香水蘭、女蘭、燕尾蘭、大澤蘭、水蘭、蘭澤草、香草、煎澤蘭、《科名》金粟蘭科

茶蘭は茶に彷彿たる楕圓形對生葉を有し、丈け二三尺に過ぎざる常綠小灌木であるが、其幹極めて細きを以て、自ら直上することが出來ないで、一尺ばかりになると皆な下に垂れる、そこで盆栽物は皆高い臺の上に乘せて置くの例である。

花は黃金色粟の如き小粒花を、穗狀に點綴して、たらりと垂れるのである、餘り見處はないが、花に清香あるを以て愛せられるのである、最も一花を採つて鼻に當てゝも何等の香もないが、之れを一室に閉籠めて置くときは、自ら暗香浮動するのである、そこで此の香氣を葉狀よりして茶蘭の名を得たのである。

稍れには內地にもあるが、大和本草に、茶蘭常好恐レ寒。如ニ冬日一。被ニ紙袋一。以令レ不レ中ニ寒風一。とあるが如く、非常に寒氣を恐る、のでまだ少ないのである。

▲黃蝴蝶《臺灣名》番蝴蝶（ホワンベイヤナ）《異名》金糸蝴蝶、錦蝴蝶《科名》荳科

黃蝴蝶は二回羽狀複葉を具する小灌木で、一寸見ると小柄な合歡の木の樣である、多數鮮明なる紅斑文を帶びたる黃色の花瓣は、縮緬の如くに縮れ上り、且つ殆んど花托に達するまでに反跳する、之れがため元來短かゝらぬ蕋糸は一層長く露出し、殆ど髮狀を爲し居る處、其の鮮明なる紅黃色と共に頗ぶる韻致でも

る。

各枝の頭上に生ずる花梗は夏の初めより秋に至るまで、一花咲くに隨つて、一蕾を生ずるので、開花の期間頗る長く、隨て初花の實は既に熟して居るにも拘はらず、花も尙ほ咲いて居る、孫元衡の詩に

流岩春光爛熳枝。翩翩似醉更疑癡。家々一樹錦蝴蝶、是夢是花人不知。

といふて居るのは之れである。

▲夾竹桃《臺灣名》夾竹桃（グヱテクトテ）《科名》夾竹桃科

夾竹桃には柳然たる葉が三枚づゝ輪生するので、其の葉脇に生ずる枝は何れも三叉になる、そして曾に葉のみならず、木の仲び工

合纖緯の强靭なる處、共に柳に似て、高さ十餘尺に達する常綠灌木である。

花は淡紅多瓣にして、桃の花かと疑ふばかりの艶麗なる梢頭花を、夏秋二期に涉りて開くのである、稀れには絞又は白もあるが見榮がない、誰やらが、竹の葉に桃の花を夾さんだ樣だから夾竹桃といふと說明して居つたが强ち無理でない。

樹容韻致に乏しく、且つ有毒植物の一であるが、花の艶麗なるため、能く庭園に培養せられて居る、書物には東印度原產の植物たといふてある、何だか西洋臭い感じのする木である。

▲鷲爪花《臺灣名》雞爪蘭（ゴイリヤウラン）《異名》鷹爪蘭、鷹爪桃《科名》蕁荔枝科

鴛爪花のことは殖産局苗圃の苗木代價目錄の中に左の如く記してある。

蹋地灌木にして、枝條二三丈に伸長す、夏時帶綠白色の奇花を開く、五瓣細長、綏く花心を抱き、雌雄蕊を見ず、形狀恰も黃鴛爪に似たり、香氣蒸すが如し、婦女之を簪す、庭園日陰架に適す。

云々、秋に至り胡桃に似て、やゝ小さき簇生球果を結ぶのである、其實、稍桃に似たるが故に、一に之を鴛爪桃ともいふものである。

▲美人蕉《臺灣名》美人蕉(ビイヂンチヨウ)《異名》花芭蕉《科名》芭蕉科

美人蕉は無論芭蕉の一種ではあるが、普通の芭蕉に比すれば極めて細小にして、高さ四五尺、太さは傘の柄にも及ばないのである。花亦一莖一花であるが、芭蕉に比すれば花梗稍〻强硬なるぶため、葉心より抽出したる青色の花梗は直上して、其頭頂に長瓣鱗次として、朱色燃るが如き艶麗なる花を着けるのである。

尙ほ二三の外部花瓣の上端には、綠色の細葉を付けて居るなど、花容色彩共に頗る愛すべきである、此花最も久しきに堪へ、一花月餘の久しきに及ぶ范浣浦の詩に。

巳長葉中花。更生花上葉。我欲剝蕉心。酒痕暎双頰。

といふを見れば、思半ばに過ぐるのである。

▲月桃花《臺灣名》月桃花(ゲイトチホエ)、《異名》虎于花、《科名》蓼荷科

月桃は一に虎于花と云つて、本島至る所の山野に自生し高さ五六尺に達する多年生草である、其の形狀は丁度蘭蕉の樣な物である、

其葉は極めて强靱なので、種々の器物製作の原料や、麻苧の代用に供せられて居る、殊に端午の日採て角粽を卷くを以て有名である。

花は頭上より尺餘の莖を秀んで、其先きに一莖數十蕋の淡紅花を開いて居る、花に幽香の愛すべきはないが、其の形狀は一寸蘭の花に似て頗る愛すべき所があるので、能く宴會席上の大花瓶などに挿されて居るのを見る、臺灣人には端午の日此花を摘で女兒の髮上に挿させる慣習がある、今日ではあちこちの庭園にも植付けられて居る。

▲仙丹《臺灣名》仙丹《異名》(シエンタン)さんたん、賈子木《科名》茜草科

仙丹は楕圓形漸尖葉にして互生し、夏季平頂の繖形花序花を每梢頭に着けるのである、每花深紅小球狀にして丸藥に似たるがため、仙丹の名ありと傳へて居るが、臺灣府志には左の如く記してある。

仙丹花は色紅、一朶百蕋、繡毬花に似て香なし、四月より開いて八月に至る、爛熳霞彩の如し、種、粵東潮州の仙丹山に出づ、世傳ふ、昔黃氏の女あり、此處を經過し、鬢に挿す處の紅花を遺落す、後滿山皆此花を開く、故に名く、

と何れが眞なるを知らされども、挿木繁殖法尤も容易なるを以て、所々に栽培せられ、艶麗亦愛すべき花である。

挿木法の繁殖容易なるが故に、賈子木の名を得たのである、尙ほ老木には殆ど四季に花を開いて居る。

▲蕃花《臺灣名》蕃花《異名》いんどそけい、緬梔子《科名》夾竹桃科

蕃花は既に名けて蕃花といふ、其昔舶載に係ることは知るべきであるが、其挿木法に依つて非常の繁殖力を有するを以て、今日では本島至る處觀賞用として庭園に栽植せられて居るから、今では本島植物の一として何人も異議のない所である。

木は疎枝大葉の半灌木で、一年數回整然たる三叉狀に分枝す、そこで中村木州氏、私かに臺灣三叉又は島三叉と異名して居るのも而白い。

葉は明瞭なる横脈を有する披針形全邊にして互生し、其質稍や厚くして光澤を帶びて居る。

花は白蠟色の食匙形六瓣相交りて螺旋狀を爲せる、長八九分の小花を、枝頭に不規則なる複繖形花序に排列して居る、其の薄抹的淡紅色なる瓣端と濃黄色なる花心と相映ずる所、優妍頗る賞するに足る、香氣亦愛すべきものがある。

臺灣志に蕃花を以て貝多羅樹と混同して記したる以來、之れを同一視する者もあるが、兩者全く別物であるから混同してはならぬ

綿紗乾すに蕃花も咲いて公醫館　紅竹

▲茉莉花《臺灣名》木梨花《科名》木犀科

茉莉花は卵圓形對生輪生混淆葉の細小灌木にして、花は重瓣純白の小花である、花に峻烈なる佳香あるがため、包種茶製造の香料にもし、婦人の簪にも代用せられるので、價の頗る高い花である、之れがために畑にも盛に栽培せられるが、又觀賞用として庭園に

も栽培せられるのである、多少の花は一年中咲いて居るが、一番盛なるは五六七の三ヶ月間であるから、季物としては夏となる。

孫元衡の詩に

名花聞道出南荒、親到南天聞妙香、弟是素馨兄是菊、澹烟如水月如霜、

佳人小立畫廊西、紈扇迎風手自攜、雪瓣恐教蟬翼重、縵華應遣鳳頭低、

却月盆中向晩芳、塔臺誰與散天香、殘魂消盡同禪寂、不覺瓊花在枕旁、

といふのは之である。

▲臺灣素馨《臺灣名》秀英花《異名》四英《科名》木犀科

秀英花は五乃至九個の卵形小葉より成れる羽狀複葉の常綠踏地植物で、花は純白の合瓣花冠を有し、聚繖花狀に排列して居る、殆ど東印度原産のそれと變りがないが、瓣に櫻花に似たる缺刻あると、莖丈の長きとを異なりとするのである。

此花、昔は蕃社の林中に野生して居つたのであるが、芳香强烈なるを以て、今では包種茶製造の香料中第一高價の花として栽培せられ、又日蔭架用、籬用としても植ゑられるのである、花は五月より殆ど半年間咲きつゞけるのであるが、季物としては夏のものである。

▲爵金《臺灣名》窰黃《科名》蘘荷科

爵金は支那東印度と共に本島にも古來存在して、蘘荷科に屬する

多年生植物である、高さ三四尺に達し、莖及葉は檀特に似、長楕圓形にして尖り、同じく光澤がある、花は其質全く茗荷に似て、多數の花苞相包合して居るのであるが、本末なしに同一太さで、其大なること四五寸に達するものがある、そして此の奇形の花は美人蕉の如く、葉に接近して頭上に開くのである、其の鮮明にして淡紅色を帶びて居る處、頗る賞すべきである、中には白もある、此の花最も耐久力あり、生けて數十日に至るも、尙ほ萎れざるも妙である、元は地下莖より染料を採るために作りたるものなれども今は多く觀賞用として栽培せられて居る、俳諧歳時記にもあるか、本島には特に多いので再び記す。

▲濱萬年青《臺灣名》文珠蘭（ブンシウラム）《異名》はまわた《科名》石蒜科

萬年濱青は、本島平原、特に海邊に多く自生し、高さ二尺餘に達する多年生常綠草である、葉は廣披針形にして明瞭なる平行脈を有し、光澤がある、葉は元來地下莖より叢生する質であるが、時としてはそれが四五寸位立ち上つて居るのもある、凡ての點が萬年青といふ恰好である。

太き花莖は、葉叢の中心より直上して二尺餘に達し莖上に白色なる多數の花を繖形に開くのである、秋に至て拇指大の實を結ぶ、實物は名ほどに目出度いものではないが、海埔趣味を發揮するには好材料である、俳諧歳時記にも記事がある。

八重山人の指懸小屋や濱萬年青　夜明

此の窟鬼や住みけん濱萬年青　烏蛙

▲指甲花《臺灣名》柴指甲《科名》千屈菜科

幹葉共に石榴に酷似したる小灌木にして、秋季に至り細小なる白花を開くのである、花は見るに足らぬが、其香氣木犀に似たるを以て、庭園に栽培せらるゝのである。

此名の出所が面白い、臺灣の婦人は指甲を赤く染むるの風習がある、之れを染むるには、普通鳳仙花即ち爪紅の花を用うるのであるが、之れは年中存するものでないから、寒中には何か他に之れが染料を索めねばならぬ、そこで爪紅のない時分には此の一年中常綠なる柴指甲の葉と鍋炭とを用ゐて赤く染めることにして居る是即ち此名を得た所以である。

▲胡蝶蘭《臺灣名》胡蝶蘭《異名》恒春蘭《科名》蘭科

胡蝶蘭は樹木に寄生する蘭科植物にして、葉は那古蘭に似て更に幅廣く肉厚く、其長さ四五寸にして、一株三四葉乃至七八葉を有し、夏季葉の間より花莖を抽出し、蝴蝶形純白の花を垂れ咲く、花に何等の香なきも、其形の美なるを以て珍重せらる、此蘭恒春の山地より産するを以て斯く名くるのである。

▲日々草《臺灣名》日々春《異名》月々紅、華魁草《科名》夾竹桃科

日々草は楕圓形の對生葉を有し、高さ一二尺に過ぎざる多年生草木である。

花は四瓣淡紅紫色花にして、莖上部の葉脇に開き、下部に細き筒部を有するやさしき花である、其花期極めて長く、每枝一花謝すれば一花又開き、夏秋の交、殆ど每日開かざるの日なきを以て、此

等の名を得たのである。

此花元來やさしく寂しき花であるからして、一輪一花としては見るに足らぬが、翠葉蓊鬱たる上に、無數の小花を散點し居る樣は又一種愛すべきの花である。

臺灣では一年中殆と開かぬ時はないのであるが、元來が熱帶地植物であるからして、夏季を最も盛りとするので夏の季題とするを至當とする、今は內地にも輸入せられて居る、尙ほ華魁草の名は睡蝶蘭にも用ゐれて居るから注意せねばならぬ。

▲綠珊瑚(臺灣名)綠珊瑚(リョクチシヂオ)(異名)覇王樹、綠玉樹、仙人掌、シャボテン、蟹シャボテン(科名)仙人掌科

綠珊瑚は仙人掌の異名であつて、種類は澤山あるが、一番多いのは肉質長葉にして倒卵狀を爲したるもの及び扁平笏狀荒角棒狀を爲したるものと、一種蔓生にして樹木土塀などに纏繞して居るものとである、何れも鋭利なる多數の刺を有するを以て、土人は能く籬用として植ゑて居るのである、夏に至り刺腋より大形白色の螺旋狀花を開くのである。長路洲の詩に曰く、

一種可人籬落下。家々齊挿綠珊瑚。
想從海底搜羅日。長就苦痕潤不枯。

といふのが之れである。

元來綠珊瑚は仙人掌科の一植物で、普通にサボテンと和名し、笏狀或は倒卵形を爲したるものであるが、同じ綠珊瑚でも、打狗には一種特別のものがある、其高さ二三間に達し、幹は樹狀を爲し、

枝は眞圓綠色の細條を、無數に葉の代用的に生じて居るので、全く綠の珊瑚其のまゝである、枝は全く肉質で、さはるとほろ〳〵折れる、折れると白い汁が出る、土人は其汁が目に這入ると目が潰れるといふので非常に恐れて居るが、其實、此の白液は海底電線用の無彈力護謨の一種たるグタヘルカを含有して居る有用物である、曾て川上技師は「臺灣の地方代表植物景色」なるものを選定したとき、打狗の綠珊瑚なる一項を擧げられて居たが、全く其通りで、實に此の景色は臺灣の外、寧ろ打狗の外見ることの出來ない珍らしい景色である。

▲水布袋《臺灣名》布袋蓮（ホテイレン）《異名》布袋草、水玉蘭、ヒアシント《科名》雨久花科

布袋草は一に水布袋と云ひ、雅名を水玉蘭など〻云つて居る、洋名はウオタア、ヒアシントで、臺灣では布袋蓮と云つて居る、一種の水草にして、葉柄に奇怪なる浮囊を有して居る、布袋の名を得たのは蓋し之れが爲めである。

全體の形は一寸水葵に似て居る、そして浮囊に依て常に池沼などの水上に漂泊して居るのである、其の大なるものに至ては優に二尺以上に達するものもある。

花は薄紫にして多數の小花穗狀に排列し、頗る優美である、此花は變種を以て有名であるが臺灣には未だ一種しか無いらしい、其の葉柄の浮囊の形狀は恰も菱藻のそれの如くであつて、そしてより大きく、より奇なのである、花の壽命は一日限りだが、あとから

〳〵と咲いて暫らくの間續いて居る。

此花たる、内地に於ても漸く數年前の舶來に係り頻りに販賣愛玩せられて居る、殊に臺灣にには明治三十五年に三株新宿御苑より來り、一株枯死し、二株より繁殖したもので、數年前迄は臺北地方に於ても尙ほ一株數十錢の高價に販賣せられた例しもあるのであるが、其性質の臺灣溫度に適するのと、其の繁殖力の猛烈なるとに依りて、今では一の野生植物として至る所の埤圳泥溝中殆ど之れを認めざるはなき有樣に至り、殆と臺灣植物の感があるので茲に掲げたのである。

▲檳榔樹花《臺灣名》檳榔（ビンロウ）《科名》棕櫚科

檳榔樹は棕櫚科に屬する熱帶地植物の一種で、直上三十尺以上に至り遠〳〵から見ると、丸で丈けの高い棕櫚を見る樣な感じのする樹である、四時綠葉を戴いて居て、日光を遮ぎり、凉氣を送るので、熱帶地方にては到る所之れを植ゑ、ために大に風景を添て居るのである、殊に臺灣の南部地方に在りては其の子實を得るの目的を以て之れを栽培して居るのであるから、之れを見ること一層多く、家の周圍は勿論、山や畠の間には森林の體裁を爲して居る所が多い、檳榔樹は毎年六月ごろ淡黃色の蠟花を開き、八月頃拇指大の靑い實を結ぶのである、其形狀はやはり棕櫚と同じく一穗に數十粒乃至百餘粒の多きを簇生するのである、兎に角熱帶趣味を發揮するに恰好の詩材である。

▲楊桃《臺灣名》五歛子（ウチヤムツイ）《異名》洋桃、羊蒟、羊桃《科名》風露

草科

楊桃は蒂荔枝の葉の如きもの七八葉より成れる羽狀葉の大木にして、其果實は鋭角なる四稜狀を有する拳大の奇形果で、熟すそに隨て、滑澤にして、漸薄淡紅色を帶び、其形色共に珍重すべきものである、味は初め峻酸にして殆ど生食すべからざるを以て、土人多くは之れを切りて乾かし置き、隨時味を付けたる汁に浸して食するのであるが、紅熟したるものは多少甘味を帶びて來るので生食果實としても賣つて居る、內地人は好んで觀賞用に買ふ。

▲漂木《臺灣名》紅樹（アンチュウ）《異名》茄藤、五跛梨、マングローブ、おほばひるぎ《科名》漂木科

打狗海邊のひたひた水の中に何やら小さな林を爲して茂つて居る木がある、之れが打狗名物の一たるマングローブである、惜しいかな此處は淺野氏の埋立豫定地であるから遠からず埋立てられて滅亡するのである、そこであまり惜しいものだからとて、有志者からマングローブ保存請願をするはづである、抑もマングローブなるものは一に之を紅樹と稱し印度其他熱帶地方一帶の沿岸に自生する常綠樹にして、葉は橢圓形或は卵形で、微凸があつて、其質厚く且つ光澤がある、花は夏季に至り、蕚より短かき黃色有毛の瓣を生じ、枝頭に繖形花序に開くのである、其種子が、また樹枝から落ちない內に發芽し、長き幼根を、さながら氣根の樣に垂して居るのも奇であるが、更に奇なるは、此植物は潮水の干滿する處に生じ、潮の達する所より根を生じ、干潮には根上りとなり、

滿潮には海中森林となるを以て有名なる植物である、曾て川上技師と旗後に邂逅したから、例の保存請願の話をすると、成程基隆のは築港のために疾くに無くなつて、今あるのは此處丈けになつて居る、それも愈滅亡するといふに至ては頗る惜しむべきではあるが、併し文明は自然を破壞するものなり、との諺もある世の中だから、何處迄保存するの必要があるかは問題だらう、といふことであつた、兎にも角にもマングローブなるものは詩材として最も趣味の多い熱帶植物の一である。

▲蒲桃（臺灣名）蒲桃（ポタトウ）（異名）ふともも、香果（科名）桃金孃科

蒲桃は椎の葉に似て、やゝ大にして、且つ光澤ある披針狀對生葉の常綠樹で、花は白色大形にして、下生子房を有する完全花である、尤も花被は短小であるが、多數の雄蕋が、割合に長く花被上に突出して自然に大きくなつて居るので、趣味も亦そこにあるのである、果實は林檎に似て小さい、のみならず其の數も花と共に甚だ少いが、葉の高潔なるを愛し、賞觀用として栽培されるのである。

▲蕃石榴（臺灣名）杋仔（バラア）（異名）ばんじらう、莉仔芙（科名）桃金孃科

蕃石榴は楕圓形對生葉を有し、北部臺灣の郊野中何處にても野生して居る常綠小灌木である。

果實は倒卵形の醬果であるが、果項の突起、石榴に似たるを以て此名があるのである、實に小粒の種子多く、味亦甚だ美ならず、且つ一種松脂の香あるを以て、內地人の口には適しないが、土人

は生にても食し、鹽漬としても食するのである、殊に蕃人は一般に珍重すると傳へて居る。

▲牛心梨《臺灣名》牛心梨（ゲウシムライ）《科名》蕃荔枝科

牛心梨は本島阿緱廳下に産する一果樹にして、枝葉共に殆と蕃荔枝に似たる常綠喬木である、果實は蕃石榴に彷彿して且つ稍々扁平長大で、夏季に至り黃熟するのである、味は餘り甘美と迄は行かぬが、又一種の風味を具へて居る。

▲月橘《臺灣名》山柑（ソウカム）《異名》七里香、十里香《科名》芸香科

臺灣府志に

七里香は木本にして、一に山柑と名く、花は叢生して柑の如く、葉は珠蘭に似たり、花は五瓣にして色白く、香氣濃郁、數十步を越ゆべし、六月實を結ぶ、大さ豆の如くにして末尖る、初めは綠にして後紅、一枝數十を排比す、緋珠の如し、能く烟瘴を避く、之を植る所の地、蠅蚋生せず、臺產也（臺海采風圖）

とあり、又范浣浦の詩に

翠蓋團々密葉藏。繁花如雪滯幽芳。分明天上三珠樹。散作人間七里香。丹桂婆娑猶八俗。繡毬攢簇太郎當。何如瓊島嫣然秀。采掇還傳辟瘴方。（婆娑洋集）

とあるのが之れである、木の形狀は蜜柑の多枝多葉なるものと見れば違はない。

月橘と稱するもの丶內には、尙ほ一種の垣用にするものがある、小葉密生して垣に適するものである、一見すれば直に別物たることは分るが、同名同科のもの故、七里香と混じてはならぬ。

▲破布子《臺灣名》破布子（パテポテヂイ）《科名》紫草科

破布子は北部臺灣の特産にして、葉は梧桐に似て甚だ小さく、殆んど巨指大に過ぎず、實は殆んど楝の實の青いのと同じである、土人は五月ころ其實を採り、味噌漬として飯の菜にするのである、が、就中僧侶に愛食される、味噌漬といつても、土人のは白漬だから、殆んど奈良漬の色をして居る、味は惡いことはないが、皮と核ばかりで、食ふべき部分が甚だ少ない、土俗に、之れを食すれば肺を開くの効があるとして居るので、好んで病人に食せしむ、葉は銀紙製造の原料に使用されるのである。

▲楊梅《臺灣名》楊梅（ユウムイ）《異名》やまもも《科名》楊梅科

楊梅は內地の暖國にも多少はあるので、既に俳諧歳時記にも出て居るが、臺灣には楊梅壢といふ地名もあるほどで、各地に非常に多く、初夏生食果實として盛に販賣せらるゝのであるから、特に臺灣植物の一として一言補足して置きたいのである。

葉は樫の葉に似て細く、果實は桑の實に似て全部に乳頭狀突起を有し、熟すれば深紅となる、木に雌雄がある、土人が庭木に賣りに來るのは、雄樹だから多くは實を結ばないのである。

▲ぢやぼん《臺灣名》柚仔（ユアア）《異名》朱欒、文旦、香欒、內紫、櫨橼、檑柚、《科名》芸香科

園藝文庫にも柚仔は柑橘の一種で、其葉其花皆柚と同じく、實の形亦柚に似て大きく芬郁乳柑の如く、其の味橙の如くにして苦く、微しく酸し、蓋し柚、柑、橙の三者を兼るより、和名抄にも柚柑と云へるならんか」とあるが如く、兎に角柚仔は柑橘類中最も大なるものである、土人は普通に柚仔と云ひ、其最も佳なるものを文旦と云ひ、最も大なるものを斗柚と云つてをる。

文旦といふ名の出所に付ては臺灣人間に種々の說がある、一說に依れば、漳州の一地方に文旦といふ處があつて、其地方から產出する柚仔が最も良好なる故、其地名に因んで文旦と呼んで居たのが、遂に柚仔の一名となつたのであると云ひ、又蘇萱地方の人の云ふ所に依れば、昔し文旦なる人が、支那から柚仔の良種を携へて渡來し、蘇萱に移植したるに、非常に佳良なる柚仔を產出するに至つたので、遂に其の人名に取て蘇萱產の柚仔を文旦と云ふに至つたのであるというて居る、而しながら「本草史」は此木に命ずるに櫱根、櫺柚、文旦等の名を以てし、且つ之を解して『柚の大なるものを朱欒と謂ひ、最も大なるものを香欒といふ、爾雅に之れを櫱根といふ』と記して居るのを見ると、文旦の名は必ずしも臺灣移植後、殊に臺灣特有の名でないことが明かなると同時に、其の出所は前段の地名說の方が眞に近いと云はねばならぬ。

內地の例に依ると、和名抄には『柚柑』と書いてあり、又普通には『ザボン』で通つて居るのであるが、皮を剝いて見ると、其果肉が紫になつて居るので一に內紫とも云つて居る、そこで園藝文庫には香欒と書して『うちむらさき』と訓まして居る、臺灣でも文旦といふ語は矢張上等の柚仔といふ意味に使用されて居る。

柚仔には文旦と斗柚との區別がある、斗柚は斗桶ほどあるといふので此名を得たのである、譬へば文旦が子供の頭ほどあるとすれば、斗柚は水牛の頭ほどもある、けれども斗柚は文旦の甘味水氣共に豐富なるには及ばないのである。

園藝文庫は柚仔を二月の條に記して居るから、之れを晩冬の季物にして居るのであるが、楊載の橘中篇中にも盛夏開白華。朱實懸高秋。としてあるより見れば、支那内地でも秋として居るのであるが、殊に臺灣では秋季、しかも初秋の物たることは事實の上から見て爭ひのない所である。

▲龍眼肉《臺灣名》龍眼(リエンゲン)《科名》無患樹科

龍眼樹は無患樹科に屬する支那原産の常綠喬木で其の多葉にして繁茂せる處、遠く之を望めば、恰も櫞の趣がある、が、葉は光澤ある五七葉の小葉より成る一回羽狀複葉で、花は無趣味なる五瓣小花で見るに足らぬ。

果實は黃褐色にして、やゝ鱗狀形を爲せる粗糙皮を以て被はれ居る、眞ン丸な拇指大の球果である、皮を剝ぐと其内更に透明なる假種皮即ち果肉を以て、眞黑無患子の如き種子を包で居る、それが恰も動物の眼球然として居るので、龍眼肉の名を得たのである、其假種皮の甘味多漿なる所を賞玩するのである。

▲荔枝《臺灣名》荔枝(ライチ)、らいちい《科名》無患樹科

荔枝樹は龍眼肉と殆ど同一であるが、葉のやゝ尖れると花の瓣なきとを異なりとするのである。

果實も略ぼ同一であるが、稍楕圓形にして其大なること龍眼に二三倍し、且つ少しく酸味を帶び居るを以て、龍眼肉の峻甜なるに比して一層愛用せられるのである、唯此果物は本島未だ多からざるを以て殆ど兩廣地方よりの輸入に係るのである、孫元衡の詩に。

頗怪繁星謫軟塵。筠籠將出故鮮新。味合仙意空南國。姿近天然是美人。丹扇潛胎珠玓瓅。脂膏滿綻玉精神。一時喚起狂奴興。萬事灰心渡海身。

不受鹽欺與蜜侵。騷人新摘自沉吟。輕紅照肉白凝齒。芳氣毀魂寒沁心。笑後左車生小熅。望中飛騎更相尋。南楊[illegible]醜北盧抽。

迴避頹珠出寶林。

范浣浦の詩に

絳羅衫子雪肌膚。一種香甜絕勝酥。消渴液寒青玉碗。脫露盤走水晶珠。阿環風味差堪擬。盧橘芳名亦少殊。飽啖拚教烟霧絕。不辭人喚作狂奴。

江家色綠宋家紅。曾識端明譜牒中。到此得嘗過玉食。無勞想象判丹楓。詩才漫說窮騷雅。興味猶應傲上公。萬事灰心殊不惡。只愁海颶咀筠籠。

とあるのが之れである

▲檨仔（臺灣名）檨仔（ソアヤア）（異名）檬果（マンゴー）、番蒜、番檨、（科名）漆樹科

檨仔は一にマンゴーと稱し、漆樹科に屬し、高さ數十尺に達する、常綠喬木である、東印度の原產丈けに、最も早く本島に渡つた熱帶果樹の一である。

葉は廣披針形の粗大なる三葉輪生の單葉で花は小形黃色の花瓣を圓錐花房に枝頭に排列するばかりで何の奇もない、が其果實が頗る珍重のなである、形は普通拳大扁平にして、略ぼ楕圓形を爲て居る、其大なるものに至ては優に三四寸に達するものがある、夏

季黄熟す、肉皮内には核子に緊著せる柔軟纖維を分布して居るので、喰ひごろに軟熟したるものは、核子より果肉を切離すことが出來ない、そこで拳大の大きいやつに其まゝ嚙り付いて、甜るやうに喰ふのである。

味は唯甘いのであるが、一寸甘瓜的香氣を帶びて居るので、嫌ふものもあるが、之れが熱帶果實中最美味なるものゝ一に擧げられて居るのである、尤も青果は峻烈なる酸味を帶びて居るから、藏して其の黄熟するのを待たねばならぬ。

赤嵌筆談には

樣に三種あり曰く、香樣、木樣、肉樣是れなり、香樣は稍〻大味にして其香多く得べからず、食ふ所のものは木樣なり、肉樣は晒乾して糖に用ゆ、拌蒸亦久しく藏すべし、臺人多く鮮樣を以て蔬に代へ、豆油或は鹽と共に食ふ、北路半線より以上は即ち絶えてなし、字釋に樣字なし、色味杏に似たり、或は是れ香杏を誤つて樣に作りしものならん。

とある、兎に角今尙北部には產しないのである、張鷟洲に樣仔の詩あり曰く

參天高樹午風清。高實累々當暑成。好事久傳蕃爾雅。南方草木未知名。

樣仔の香になるゝころ暑も慣れて　　菱　巴

▲蘋婆《臺灣名》蘋婆（ピンポヲ）《異名》ぴんぽん《科名》梧桐科

蘋婆は臺南地方に產する梧桐の一種にして、果實は通草の莢に類

し、稍短かくして且つ太く、夏に至り熟して茶褐色となり、自ら破裂して三個の種子を吐く、莢の裏面深紅にして眞に美也、種子は形狀大小共に茶の實大で、其れを煑て食するときは栗の如き味のするものである、內地人は其形色美を愛して觀賞用とする。

▲蓮霧《臺灣名》輦霧（レンブウ）《異名》蒲霧、軟霧《科名》桃金孃科

輦霧は葉、滑澤披針狀にして、蒲桃に似て稍小さく、花亦蒲桃に似て居る、果實は無花果に酷似したる奇形果にして、果皮透明滑澤林檎に似て淺紅色を帶び、味ひ亦林檎に似て稍酸味を帶びて居る。

▲鳳梨《臺灣名》茎萊（チンライ）《漢名》鳳梨。黃梨。《和名》まつりんご。ほうりい。あなな す。《洋名》パインアップル《科名》鳳梨果

茎萊は、其昔熱帶亞米利加に自生したものだと云はれて居るが、近世に在つては廣く各熱帶地一般に栽培せらるゝ常綠草である、葉は厚肉にして强靱なる平行脈を有し、長大にして三四尺に達し、其緣邊には鋭利なること荊棘も啻ならざる大鋸齒を具へて居る、一寸唐黍の二三尺に伸びたころの恰好である、畢竟其葉が鳳尾に似て、其味が梨に似て居る所から鳳梨の名を得たのである。

果實は、草心より軸を生じ、地上より二尺ばかりの頂頭に稍松毬狀を有せる、長さ五六寸に達する毬果の代表果實を結ぶのである、其頂端に芽あり、數個の小葉を簇生して居るが、食用にするものは、甘味を增さしむるために其芽は缺かれてないのである。

夏日黃熟したるものを食用にするが、多漿にして、少しく酸味を帶び、頗る美味である、果實にペプシン類似の成分を有すると纖

維の織物に使用せらるゝを以て名高い、苧麻布即ち是である。

此果實は熱帶植物だけあつて、本島に於ても尙且つ寒さを恐れるのである、そこで何れも日南を受けた山畑に植ゑる、相思樹と交え植ゑると其葉が自然肥料になつて、能く出來るといふので、能く相思樹と交え植ゑてある處一段の好詩材である、又其果形も既に奇であるが、其皮を累旋形に剝いで、店頭に並べて居るのは更に奇にして、何れか好詩材ならぬはないのである。

鳳梨や膽熱も思ふ舌荒に　　櫻　涯

▲れいし《臺灣名》苦瓜（コチコイ）《異名》つるれいし、錦荔枝、にがうり

《科名》胡蘆科

苦瓜は內地のつるれいしと異つた處はないが、其大さ殆ど數倍し、土人は其稍〻熟して白くなりたる處を、猪肉と煮て食するのである、內地の如く、果實として生食するものとは用ゐ方が違ふ。

▲烏龍茶《臺灣名》烏龍茶（ウオリヨンテエ）

烏龍茶は採取したる生葉を、日南又は室內にて乾燥萎凋せしめた後、炒釜に載せて、二回ほど雜ツと炒り、次に平籠に入れて足にて十分に揉み、後、乾燥のため、三回ほど焙爐にかけるのみである、斯くの如く足で揉むはかりてあるから、其形狀團塊にして、黑いのである。

烏龍茶も亦普通の茶の樹の靑葉を以て製造するのであるか、臺灣は暖地だけに、茶葉も四季に發育するから、茶も四季に製造して居るが、其の最も盛に、最も佳良品の出來るのは夏季である、其